

第二章

新聞記事に見る山鉾行事の近代

明治時代のくじ取り式・くじ改め

今中 崇文

本事業では、すでに『京都祇園祭の山鉾行事歴史資料調査事業Ⅱ』でも紹介したように、祇園祭山鉾行事の近代を明らかにすべく、明治以降に発行された新聞記事の調査も行ってきた。京都の地方紙であり、現在の『京都新聞』の前身となる各紙のうち、マイクロフィルムなどで紙面を確認することのできる『京都滋賀新報』（明治十五年創刊）、『日出新聞』（明治十八年創刊）、『京都日出新聞』（明治三十年創刊）などから祇園祭に関係する記事を抽出し、順次、翻刻している。

本章では、これまでに翻刻した明治時代の新聞記事から、祇園祭山鉾行事における主要行事のうち、くじ取り式とくじ改めに関係するものを取り上げる。くじ取り式は、七月十七日（前祭）と同二十四日（後祭）の山鉾巡行における巡行順を定める行事であり、応仁・文明の乱による中断を経、山鉾巡行が復興した明応元年（一五〇〇）に始まったとされる。現在では、毎年七月二日に京都市役所内にある市会議場で、祇園祭山鉾連合会をはじめ、各山鉾を護持している保存会、八坂神社及びその氏子組織である清々講社の役員等が一同に介し、京都市長を立会人として執り行われる。この日にくじを引くのは、「くじ取らず」としてあらかじめ順番が定められている一〇基を除く、二四基の山鉾で、その結果は新聞やテレビといったメディアを通じ、大きく報道される。一方のくじ改めは、くじ取り式で定められた巡行順が守られているか確認する行事であり、前祭では四条堺町北西角の野村證券ビル前、後祭では寺町御池北東角の京都市役所前にくじ改

め場が設けられ、京都市長を奉行役として行われる。くじ改め場で繰り広げられるくじ札を差し出す独特の所作は、山鉾巡行のハイライトのひとつになっている。

明治時代のくじ取り式、くじ改めの実態については、これまで、それほど大きく注目されてこなかった。例えば、現在のくじ取り式は前祭・後祭ともに同じ日に行っているが、江戸時代には山鉾巡行の前日である旧暦の六月六日と十三日に六角堂で執り行われていた「川嶋 二〇一〇」。また、現在、京都市長が務めているくじ取り式やくじ改めでの役割は、江戸時代には京都町奉行所の下役である雑色が担っていた「安井 二〇二〇」。これら江戸時代の行事のあり方が、近代を経、どのようにして現在のような姿になっていったかを明らかにするべく、まずは明治時代の新聞記事から見ていきたい。

明治時代のくじ取り式

これまで、明治時代のくじ取り式については、当初は府庁舎で行われ、市政特例が外れて京都市が成立した翌年の明治三十二年（一八九九）からは京都市役所の貴賓室で、基本的には京都市長が立会人となって執り行われていたとされてきた「京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 二〇一一・八」。

現在、確認することのできるくじ取り式についての最も古い新聞記事は、明治十七年（一八八四）の『京都滋賀新報』のものである（記事1）。この年と翌十八年（一八八五）は、江戸時代と同じく、前祭と後祭に分かれてくじ取り式が行われている。ただし、日付は異なっており、明治十七年は七月十五日（前祭）と二十二日（後祭）に、明治十八年は七月十八日（前

祭)、二十五日(後祭)と報じられている(記事1、3、4、5)。両年における日程の違いは、明治十年から同十七年までは祭日が七月十七日と二十四日であったものが、翌十八年から二十二日と二十八日へと変更されたことから生じたのであろう。

明治十九年(一八八六)から二十一年(一八八八)にかけては、前祭と後祭が同じ日にくじ取り式を行っていた。明治十九年は、コレラの流行を受け、十一月八日まで府下の祭りが停止されていたが、京都府による私祭停止の解除を受け、同月二十二日前祭と後祭が合同して巡行を行うことになった(記事6)。それに伴い、その前々日である二十日にくじ取り式を執り行ったようである(記事7、8)。翌二十年(一八八七)は、コレラの流行を避け、日程を大幅に繰り上げて五月七日と十日に山鉾巡行を実施しているが、くじ取り式は同月五日に合同で実施している(記事10)。翌二十一年も、巡行の日程が二転三転し(記事11、12)、最終的には七月十七日と二十四日となりながらも、くじ取り式は十四日前祭・後祭が合同で行っている(記事13)。

翌年の明治二十二年(一八九八)は、前祭と後祭が別々にくじ取り式を執り行う最後の年になる。その日程は前祭が七月十三日、後祭が二十日となっている(記事14、15)。

その後、明治二十四年(一八九一)以降は、日付は七月十五日でほぼ固定されている。ただし、明治二十八年(一九九五)は、コレラの流行によって山鉾巡行が十月十八日前祭・後祭合同で行われることになったため、くじ取りも十月十六日の実施となっている(記事31)。

先述のように、くじ取り式は、明治三十一年(一八九八)まで京都府庁で執り行われてきた。しかしながら、府庁のどの部屋で行っていたかなど、

詳細についてはほとんど報じられていない。ただし、立会人として、府庁で寺院や神社を担当していた「社寺掛」の名前が多く挙がっている(記事3、23、31、36、40)。

その翌年、明治三十二年(一九〇九)から、くじ取り式は京都市役所で執行されることになる(記事44)。日程は、それ以前から七月十五日で固定されていたようだが、明治三十九年(一九〇六)は、十五日が日曜日で市役所が閉庁となることから、繰り上げて十三日に執行したという記事がある(記事72)。また、場所についての具体的な記述は少ないが、明治三十五年(一九〇二)から三十七年(一九〇四)にかけては、市役所の「委員会室」と記されている(記事55、59、63)。

くじ取り式が京都市役所で執り行われるようになると、その立会人にも変化が見られる。最初の年となる明治三十二年には、京都市の初代市長である内貴甚三郎が、集まった一同に対し、普段は節約に務めて山鉾の修理保存に備えるよう注意を行っている(記事45)。明治三十八年(一九〇五)には、前年十月に二代目市長に就任した西郷菊次郎も立ち会ったことが報じられているが(記事68)、必ずしも市長が立ち会ったものではなかったよう、助役が立ち会っていたことを伝える記事も見受けられる(記事59、73)。

明治時代のくじ改め

明治期の新聞を見る限り、山鉾の巡行順を報じる関係からか、ほぼ毎年必ず報じられるくじ取り式に比べ、くじ改めについて報じている記事はそれほど多くない。それは江戸時代においても同じであったようで、くじ改めについて書かれた史料は極端に少ないという(京都市文化市民局文化芸

術都市文化財保護課二〇一一・四六」。

とはいえ、くじ改めが山鉾巡行の見せ場のひとつとして認識されていたのは間違いない。明治十七年（一八八四）には後に総理大臣となる松方正義（当時、参議）が立売中之町で前祭山鉾巡行とくじ改めを見物するという記事が見られ（記事2）、明治三十五年（一九〇二）にはわざわざ皇族の観覧場所前にくじ改め場を設けたことが報じられている（記事54、56）。さらには、明治三十八年（一九〇五）には、日露戦争で捕虜となつて本圀寺に収容されていたロシア兵捕虜から希望があつたことから、くじ改め場で観覧させたという記事も見られる（記事70）。また、明治二十七年（一八九四）からは、くじ改め場に警官が配置されて警備に当たつていたようである（記事29）。

数少ない新聞記事から見る限り、明治時代のくじ改めは、前祭と後祭ともに、現在のように場所が固定されていたのではなく、ある一定の地域内で場所を変えて実施されていたようである。以下、前祭と後祭とに分け、新聞記事からうかがえる範囲で変遷をまとめてみたい。

前祭のくじ改め場は、「四条高倉東入」、すなわち現在の立売中之町内に設けられ、時代が下るにつれ、その南側に設置されるものと認識されていたようである。現在、前祭のくじ改め場について確認することのできる最も古い記事は明治二十六年（一八九三）のものであるが、そこでは当初、四条高倉東入の北側に設置する予定であつたものが、都合により、同南側の今井定七方に変更したと報じられている（記事26）。翌年は、同じく四条高倉東入南側ではあるものの、「中井某方」に設けられたようである（記事28）。明治三十年（一八九七）は四条高倉東入の「青木某方」で（記事37）、翌三十一年は「今井方」の予定であつたのが、同家が喪中であつたため、「春

木藤七方」に変更されたという（記事41）。その後も、記事で確認できる限り、前祭のくじ改め場は「四条高倉」に限られており（記事52、54、56、60、64、70）、次第に四条高倉東入の南側と認識されていったようで、明治四十五年（一九一二）にはわざわざ、例年は四条高倉東入南側であるが、四条通拡幅工事の結果、北側になったと伝えられている（記事84）。

一方、後祭のくじ改め場については、「三条通高倉西入」もしくは「三条通東洞院東入」と報じられており、現在の枳屋町と菱屋町にまたがる一帯となる。明治二十五年（一八九二）と同三十六年にくじ改め場が設けられた高橋徳兵衛方については、三条通高倉西入北側であることが明記されている（記事24、61）。また、明治三十一年（一八九八）のくじ改め場が日本生命保険会社であつたことが報じられているが（記事42）、現存する国登録有形文化財（建造物）「日本生命京都三条ビル旧棟（旧日本生命京都支店）」（明治四十五年着工、大正三年竣工）と同じ位置であるとするならば、こちらも北側となる。明治二十九年と同三十七年・三十八年のくじ改め場として報じられている川島甚兵衛方は、明治二十二年（一八九九）に川島織物（現川島織物セルコン）の二代目・川島甚兵衛が建設した川島織物参考館（二）ではないかと考えられる。

こうして設置されたくじ改め場には、すでに明治時代から、行政から立会人が臨席していた。前祭のくじ改めには、主に下京区長が出ていたようだが、京都市が成立した翌年の明治三十一年以降には、そこに市の助役が加わる年が見られる（記事52、64、71）。後祭のくじ改め場には、下京区長に加えて上京区長や職員が臨席している年も見られ（記事19、21、34、57、61、71）、こちらも明治三十一年以降は市の助役が加わつたりもしている（記事71）。その他にも、明治三十一年以降になると、清々講社の幹

部が臨席している記事が見られるようになる（記事46、71、84）。

むすびとして

以上のように、明治時代の新聞記事から、くじ取り式とくじ改めについて、その大まかな変遷をまとめてみた。両行事ともに、明治時代を通じ、さまざまに変化を見せているが、記事に描き出された姿は断片的なものにとどまるため、その変化が生じた背景まで読みとることは困難である。それは、今後、他の資料と重ね合わせて分析することにより、明らかにすることができであろう。また、ここで明らかになった両行事の姿は、まだ現在のものとは異なっている。引き続き、大正から昭和にかけての新聞記事についても丁寧に見ていきたい。

〔注釈〕

- （1）現在、川島織物セルコン本社市原事業所（京都市左京区静海市原）内に設けられている、同社の企業博物館、川島織物文化館の前身とされる（川島織物文化館サイト <https://www.kawashimaseikon.co.jp/bunkakan/>）。

引用・参考文献

- 川嶋将生『祇園祭 祝祭の京都』吉川弘文館、二〇一〇年
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編『写真でたどる祇園祭山鉾行事の近代』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、二〇一一年
安井雅恵「描かれた雑色―祇園祭礼図を中心に」『大阪府立大学文学会 人文学論集』三八、二〇二〇年

明治時代のくじ取り式とくじ改め関連記事（翻刻）

〔凡例〕

- ・本資料は「京都祇園祭の山鉾行事」歴史資料調査事業の一環として、『京都滋賀新報』、『日出新聞』及び『京都日出新聞』（いずれもマイクロフィルム版）を底本とし、明治十七年（一八八四）から同四十五年（一九一二）七月における祇園祭山鉾行事のくじ取り式とくじ改め関連記事を抽出したものである。
- ・底本の旧字体・異体字・旧仮名遣いについては、可能な限り、そのまま翻刻した。なお、変体仮名・合字は仮名に直した。
- ・誤字や文意が通じがたい箇所などに、翻刻文では当該語句の直後に（ママ）と付した。
- ・底本の印刷が不鮮明なために判読困難な箇所については、相応する文字数分の■を付している。
- ・記事の翻刻・校正は渡勇輝（佛教大学総合研究所特別研究員）と福持昌之・今中崇文（京都市文化財保護課）が担当した。

『1』明治十七年（一八八四）七月十六日 『京都滋賀新報』

○山鉾の列順 明十七日八阪神祭の山鉾ハ例によりて昨十五日京都府廳に於て列順番の籤を抽たるが即左の通りなり（鉾）長刀、函谷は鬪取らず一鶏、二月（山）油天神、郭巨、太子、木賊刈、保昌、占出、錦天神、孟宗、山伏、伯牙、白樂天、芦刈、岩戸（これは鬪取らず）等なり

『2』明治十七年（一八八四）七月十七日 『京都滋賀新報』

○山鉾見物 今十七日久邇宮には若宮方を伴はれ下京十二組立賣中の町市原平兵衛方にて八坂祭の山鉾を御覽に相成よしまた加藤大學總理にも随行官と俱に古川盲啞院長の案内にて同家へ至らると聞く松方參議には三井八郎右衛門氏の案内にてこれまた右同町寺田平助方に於て山鉾の行列及び鬪渡しを一覽せらるゝといふ

『3』明治十七年（一八八四）七月二十三日 『京都滋賀新報』

○山鉾列順 明後廿四日に曳出す祇園會山鉾の列順は例に因て昨日京都府廳に於て杜寺掛と上下區役所の吏員が立會抽籤をなさしめたるに左の順番となれり橋辨慶山、觀音山（以上鬪取らず）一役行者山、二鯉山、三黒主山、四八幡山、五常明山等なり

『4』明治十八年（一八八五）七月十九日 『日出新聞』

●山鉾巡番 来る二十一日八坂神社私祭山鉾巡行に付昨日京都府庁に於て抽籤したるに左の如き順番となり又例の如く長刀鉾。函谷鉾は籤不抽山棚の内岩戸山ハ籤不抽なり（一番）月鉾。（二番）鶏鉾。次に山棚ハ（一番）保昌山。（二番）油天神山。（三番）錦天神山。（四番）太子山。（五

番）山伏山。（六番）孟宗山。（七番）伯牙山。（八番）占出山。（九番）白樂天山。（十番）木賊刈山。（十一番）芦刈山（十二番）郭巨山等の次第なり

『5』明治十八年（一八八五）七月二十六日 『日出新聞』

●後日の山鉾 明後廿八日は八阪神社神幸と後日の山鉾が巡行するに付昨日京都府庁に於てその順番を抽籤せり其順番は左の如し登觀音山。橋弁慶山（此二基は鬪とらず）鈴鹿山。鯉山。常明山。黒主山。八幡山。役行者山。下觀音山（これも鬪とらず）

『6』明治十九年（一八八六）十一月十三日 『日出新聞』

●祇園祭 本月八日私祭の停止を解かれたるに付八坂神社私祭を行ふことになりしが其日割は十一月十四日鉾囃子初○今日御輿洗○十五日吉符入○十七日御輿御神幸○十八日鉾立○十九日兒社參○二十日鉾曳初○今日山建○二十一日鉾巡番鬪取○二十二日山鉾巡行（舊七日十四日合併）○二十四日御輿御還幸○二十八日御輿洗と定めたるよし

『7』明治十九年（一八八六）十一月十八日 『日出新聞』

●鬪取 舊七日分曳鉾五基山棚十四基あり舊十四日分山棚九基の鬪取りは来る廿日京都府に於て行ふと

『8』明治十九年（一八八六）十一月二十一日 『日出新聞』

●山鉾の順 明廿二日祇園祭に付鉾并山の順序を聞くに薙刀（ママ）。函谷。鶏鉾。月鉾。占出山。孟宗山。郭巨山。太子山。錦天神山。

とくさかやま あつてんじんやま やまがしやま
木賊刈山。油天神山。山伏山。蘆刈山。白樂天山。伯牙山。保昌山（以上
例年七日分）観音山。橋弁慶。黒主。役行者。常明。鯉。鈴鹿。観音
（以上例年十四日）分なり

〔9〕明治二十年（一八八七）四月三十日 『日出新聞』

●山鉾抽籤 八坂神社の山鉾町々総代より来る五月五日例年の如く
京都府廳に於て山鉾巡行順番抽籤執行相成度旨昨日出願に及びたりと

〔10〕明治二十年（一八八七）五月六日 『日出新聞』

●山鉾抽籤 昨五日常都府廳に於て明七日と十日に順行する祇園祭り山鉾
の抽籤を行ひし處七日の分は長刀鉾（抽籤外）太子山。伯牙山。
油天神山。函谷鉾（抽籤外）山伏山。木賊刈山。占出山。月鉾。保昌山。
白樂天山。孟宗山。鶏鉾。錦天神山。芦刈山。郭巨山。放下鉾（抽籤外）
岩戸山（同上）にして十日の分は北観音山（抽籤外）橋辨慶山（同上）
黒主山。鯉山。鈴鹿山。常明山。役行者山。八幡山。南観音山（抽籤外）
なりといふ

〔11〕明治二十一年（一八八八）六月三日 『日出新聞』

●八坂私祭の日附 前號の紙上に八坂私祭の事を記したるが右は大に相違
の廉あるを以て茲に同社氏子総代より區役所へ届出し日割を聞く
一日鉾囃子稽古初。十日吉符入。神輿洗。十四日鉾建。十五日兒の社参。
車掛。神幸。十八日鉾曳初十九日闖取。廿一日山鉾巡行廿二日観音山建。
廿三日車掛。廿五日山曳初。山建。廿八日山鉾巡行神輿還幸。三十一日
御輿洗等なり

〔12〕明治二十一年（一八八八）六月八日 『日出新聞』

●八坂私祭日の變更 向に氏子総代より八坂私祭の日取を下京區役所へ
届けしによりその日取を掲載せしが右の日取は氏子中に差支のあるよしに
て尚また去る五日集會して更に日取を變更昨日氏子総代より前の届を取消
し更に「六月三十日鉾囃子初。七月十日神輿洗。鉾建。同十一日
兒社参。十四日山建。十五日鉾曳初。闖取。十七日山鉾巡行。神幸。十八
日南観音山建。廿一日山建。廿二日曳初。廿四日山順行。神輿還幸。廿
八日神輿洗」と届出たり

〔13〕明治二十一年（一八八八）七月十五日 『日出新聞』

●祇園會山鉾の順 同祭 山鉾の順番は昨日京都府廳に於て闖取を以て
左の通り定めたり

十七日の分「長刀鉾（闖不取）伯牙山。太子山。木賊刈山。函谷鉾。
油天神山。錦天神山。保昌山。鶏鉾。芦刈山。占出山。孟宗山。月鉾。
郭巨山。山伏山。放下鉾（闖不取）岩戸山（闖不取）また廿四日の分
は北観音山（闖不取）橋弁慶山（闖不取）。常明山。八幡山。鯉山。
役行者山。黒主山。鈴鹿山。南観音山なり

〔14〕明治二十二年（一八八九）七月十四日 『日出新聞』

●山鉾の順 来る十七日祇園會に付順行の山鉾は例により昨日京都府に
闖取をなしたるに左の如しといふ
長刀鉾（闖取らず）芦刈山。太子山。山伏山。函谷鉾（闖取らず）
木賊刈山。孟宗山。郭巨山。月鉾。占出山。保昌山。油天神山。鶏鉾。
伯牙山。錦天神山。放下鉾（闖取らず）岩戸山。舟鉾（闖取らず）

〔15〕明治二十二年（一八八九）七月二十一日『日出新聞』

●山鉾巡行の順 来る廿四日八坂神社の山鉾が巡行する。順は北観音（鬨）取らず、橋辨慶（同上）高（黒）主（一番）八幡（二番）役行者（三番）鈴鹿（四番）鯉（五番）常明（六番）南観音（鬨取らず）なり

〔16〕明治二十三年（一八九〇）七月六日『日出新聞』

●祇園祭の届出 出すの出さぬのと一時紛紜のありし祇園會の山鉾もいよ／＼世直し景氣直しの爲めに曳出すこととなり八坂神社宮司及び氏子総代より下京區役所へ届出たる祭典の日割は来る十日神輿洗十二日兒社参。十三日鉦建十五日山建及び鉦曳初。十七日神幸。廿四日還幸。廿八日みこしあり。神輿洗なりと又来る十二日には例年の通り京都府に於て鬨引を以て山鉾の順番を定むることとなり

〔17〕明治二十三年（一八九〇）七月十六日『日出新聞』

●山鉾のくち順 昨日府廳にて式の通り行ひたる山鉾のくち取は一番木賊山。二番油天神山。三番占出山。四番伯樂天。五番芦刈山。六番孟宗山。七番郭巨山。八番保昌山。九番錦天神山。十番太子山。十一番山伏山。一番月鉦。二番鶏鉦なりと

〔18〕明治二十三年（一八九〇）七月十七日『日出新聞』

●山鉾の順番 前號の本紙に祇園會山鉾の順番を掲げたれど聊か遺漏誤聞の廉あれば正誤旁々再記せんに十七日の分は第一番は長刀鉦。第二番函谷鉦。第三番月鉦。第四番鶏鉦。第五番放下鉦。第六番岩戸山。第七番船鉦。第八番木賊山。第九番油天神山。第十番占出山。第十一番

ことほりやま 伯牙山。第十二番芦刈山。第十三番孟宗山。第十四番郭巨山。第十五番保昌山。第十六番錦天神山。第十七番太子山。第十八番山伏山又廿四日の分は第一番北観音山。第二番南観音山。第三番橋辨慶山。第四番役行者山。第五番黒主山。第六番常明山。第七番鯉山。第八番鈴鹿山。第九番八幡山にて鬨取を行ひしも一昨日にはあらで全く昨日の事なりしと

〔19〕明治二十三年（一八九〇）七月二十五日『日出新聞』

●二十四日 年々歳々祭りと云へば同じ事別に珍しき様にも覺へざれど名にしあふ京都第一の大祭り市内の賑はひはまた格別にて山鉾見んと群集ふ男女。神輿拜んと馳狂ふ老若行路は實に織る如くなりしが生憎午前十時頃即ち山鉾を曳出さんとする頃より微雨降出したれど別に甚しきこともなく却て涼さを覺へたるほどにて自他共に勿怪の幸なりき偕て山鉾は両観音山を前後に三條通りを東へ曳出し例の如く高倉西入山中利右衛門氏方にて出張の上下京區長へ巡行の鬨番號を返へし夫れより東へ寺町通を四條通りへ同通を西へ各居町へ曳戻りたるが巡行の通路は各戸とも競ひに競ふて屏風生花等飾立て一目不景氣の那邊に潜伏し居るやを知りがたき程なりしも例年の如く得意先や知己のものなど招待して赤飯に煮しめの御馳走を饗するもの或は醉客の市内を横行するなどは餘り見受けざりしは衛生の必要を悟りたる故か但しは不景氣の餘響か其邊は詳知せざれども兎に角結構のこと。斯くて神輿は午後四時頃四條御旅所發輿四條通より三方に分れて大宮三條に出で三條を東へ河原町を南へ四條通りを八坂神社へ還幸ありたり又久邇宮殿下には邦彦王殿下と共に三條富小路西へ入杉浦利貞氏方へ成らせられ山鉾巡行を御覽あらせられたり

〔20〕明治二十四年（一八九二）七月十六日 『日出新聞』

●祇園山鉾の籤順 例により昨十五日午前京都府廳に於て八坂神社氏子総代村田五兵衛土田作兵衛の二氏及び久我府属立會山鉾ある各町々より數十名登廳して山鉾巡行の番札を抽籤したるが當籤の順序に隨て今年の順番を記すれば左の如くなりと

長刀鉾 郭巨山 太子山 芦刈山 函谷鉾 伯牙山 山伏山
錦天神山 鶏鉾 木賊山 油天神山 保昌山 月鉾 占出山 孟宗山
放下鉾 岩戸山 船鉾（以上十七日）
北観音山 橋弁慶山 八幡山 鯉山 役行者山 鈴鹿山 常明山
黒主山 南観音山（以上二十四日）

〔21〕明治二十四年（一八九二）七月二十五日 『日出新聞』

●宵宮と本祭 前號にも記せし如く廿三日の宵宮は例の降ては止み止みては降れる雨の爲めに山鉾の粧飾もならねば只宅囃子にはやすのみにて通行するものも同町の人々又は招かれて赴むく人位にて近年稀なる冷況なれば新町室町の豪商店にて飾り立たる屏風諸道具を覗きに來たる人もなくいと失望の体に見受けたる處の氏子町では丁稚手代が御祭將某のパチ／＼響く斗りなりし斯る景況の上に鴨河原は水の爲に出店もならず四方寂寥たる空に鉾町の宅囃子僅かに聞ゆるのみ昨日は朝来例の曇天なりしが山鉾の巡行時分より雲の色も稍薄らぎ降來る様子もあらざるに依り九臺の鉾と山は例年の裝飾をなし順を追ふて引出し三條通高倉西入る綾徳之助方へ上下京の區吏員出張し順番の圖を受取りたるが其圖渡しの式を見ん山の四方を見んとする見物の群集一方ならず行者山が其前にて一めぐりなさんとするととき十五六歳の丁稚一名が踏倒されて微傷を受たり此混雑を狙ふ拘摸

の徘徊は幾十人をしらず式年の如く非直巡查を悉く出して注意せられたり山鉾は寺町四條に於て西へ向け勝手に居町へ引込むは例年に異なることなし正午過より空晴て久し振に輝々たる日光を見たるが風少し添たれど降來る景色もあらざれば鴨川沿の床にては來客の設けを専らにして夕景より少しく祭らしき景況をあらはしたり御旅の神輿は例刻に御旅所より出で西へ向けて二方に分れ提灯を點して祇園神社へ還御となる事例年に敢て異なる事なく連日の雨も今日に至りて晴れ行きたる氏子の喜び知るべきなり氏子市中一般のさまにて異なるは河原の水漬れより同處へ出る辻占賣菓子賣又は門附淨瑠璃などの市中へ押來る事とて意外に賑やかなる町井もありたり唯冷氣のために不景氣なるは氷賣なりしが是も五六時比の晴より少しは熱氣も増したるより其賣聲も所々に響けり祇園町先斗町も晝間は左程熱鬧たらざるも夜分に至らば御祭りといふ風をあらはすべき一週間の雨ごもりも少しは晴す處あるべし

〔22〕明治二十五年（一八九二）六月二十日 『日出新聞』

●祇園祭 祇園祭も追々近寄りしを以て昨二十日各鉾町は祇園囃しの稽古始を爲したり同祭の順序は七月一日吉符入。十日神輿洗と鉾建。十一日鉾兒社參。十四日山建。十五日鉾曳初と圖取（十七日廿四日も）同十七日山鉾巡行と御神幸。十八日觀音山建。二十一日山建。廿二日曳初。廿四日山鉾巡行。同日御還幸。二十八日神輿洗なり

〔23〕明治二十五年（一八九二）七月十六日 『日出新聞』

●祇園祭山鉾の圖取り 祇園祭山鉾巡行の順序は例に依り昨京都府廳に於て社寺分掌属立會ひ鉾町の神事掛總代出頭して圖を抽きたり即ち當日

通行の順は左の如し

十七日の分

長刀鉾（鬨取らず） 占出山。郭巨山。山伏山。函谷鉾（鬨取らず）
芦荻山。伯牙山。木賊荻山。月鉾。孟宗山。錦天神山。油天神山。
鶏鉾（鬨取らず） 太子山。保昌山。岩戸山（鬨取らず） 放下鉾（鬨取らず） 船鉾（同上）

廿四日の分

北観音山（鬨取らず） 橋辨慶山（同上） 常明山。鈴鹿山。黒主山。
鯉山。役行者山。八幡山。南観音山（鬨取らず）

〔24〕明治二十五年（一八九二）七月二十六日 『日出新聞』

●祇園祭の景況 二十二日暴風の警戒入り来りしより氏子の町々は落膽したるもありしが警戒は間違ひなく強暴なる風力となり是に雨さへ打まじりて二十三日より二十四日の祭日にかゝり別項にもある如く加茂川は出水となりたる空相にて肝心の祭日も浸潤したる体は恰かも梅雨の天にも似たり然れば蛸薬師以北二條以南は屏風の競争を見歩くものもなく幾千の子女が衣装の競争も其甲斐なく唯時機くものは新聞と碁将棋といふ景況なりき山棚の町々にては少しにても晴行きなば曳出さんと例刻の午前八時より待構ひ居れど晴あがるべき景氣も見えず待々て十時に至れば餘義なく雨合羽にて曳出し三條高倉西へ入る北側高橋徳兵衛氏の家を両京區役所の出張所として區書記三五人出張し茲にて順列の籤札を返納せり此古式雨中をも構はず相變らず混雑中に行なはれて相濟み第一番籤なしに進み行く北観音山は三條通りを寺町の角へ出たるが是は曳山にて両三日の雨泥に車行も思ふ儘ならず遅々する体を辛氣くさしと見たりけん跡より進む

橋辨慶山は寺町へはぬけずして御幸町を南へ蛸薬師を東へ寺町へ突出で北観音山を尻くらはせ観音となしズン／＼四條へ赴む様に跡よりつゞく常明山鈴鹿山黒主山鯉山役行者山八幡山も之に倣ひて寺町へ出で四條を東洞院へ至り夫々居町へ引取りたれば残るものは北観音南観音の曳山二臺にて其跡より順路を経て例刻に歸りたるがいと珍らしきは曳山に先立つ山棚にて古来より其例しを聞かず籤なしの第一番を乗越たるは古式に背くものなりとて張臂なせる人もあるよし是が明年行列の紛議にならねばよいと呟やく人もあるよしともかく京都の一大美観を降雨の爲めに諸國より入込む人に満足の縦覧させざりしは遺憾にてありたりさて御旅所に於ける神輿の還幸は午後三時半比雨中ながら行列を整のへ降み降らずみ五月の如き空模様を押えて出れば従がつて其足並も早く午後七時過ぎには三輿とも恙がなく八坂神社へ還幸となりたるが曩にも記せし如く第二の神輿を昇くものは三條臺の若者一手と定まりしより他の若者は之を不當なりとし穩やかならぬ舉動にも及ぼんとするよしにて各警察にも之を注意し三條臺の若者が朱雀野村を出る時より歸村する時に至る迄抜目なく保護したるゆゑ無事に済行く事となりしが神事はとかく酒狂より起る事なりとて神輿渡御の道筋にて神酒を備ゆるもの或る注意を受け若もの連に與へたるは四斗樽にして酒と見すれど之は砂糖水を入れ置くもありて酔狂者も少なればかた／＼無事に終りたりといふ

〔25〕明治二十六年（一八九三）七月十六日 『日出新聞』

●祇園祭山鉾の順 例年の如く各鉾町の総代等は昨日府廳に出頭し抽籤せり即ち其順序は左の如し
十七日の分

なぎなたほこ 長刀鉾、油天神山、錦天神山、占出山、函谷鉾、保昌山、山伏山、
あしかりやま 芦刈山、月鉾、伯牙山、太子山、木賊刈山、鶏鉾、郭巨山、孟宗山、
すはまほこ 放下鉾、岩戸山、船鉾

廿四日の分

みなみかおんやま 南観音山、橋辨慶山、役行者山、八幡山、鈴鹿山、常明山、黒主山、
こひやま 鯉山、北観音山

〔26〕明治二十六年（一八九三）七月十八日『日出新聞』

●山鉾巡行の景況 昨日は祇園祭山鉾巡行の當日なりしに依り朝來燦くが
如き炎暑にも拘はらず大津、大坂、神戸等より態々入京する者多く又市内
は愚か近在近郷より一泊掛にて入り込みし者夥しきに依り四條通りの
寺町以西東洞院以東は早朝より賑はしく素破巡行の時と云は、幾万の人
押し掛るやらんと思はる、程なりしが果して午前八時五十分頃先づ長刀鉾
を曳き初めしや東西より南北よりぞろ／＼と山鉾目掛けて押し寄せし人殆
んど前夜の宵山に異ならず非常に雑沓を極めたり扱て當日山鉾巡番の鬨
渡場は最初四條高倉東へ入る北側に設けありしが俄かに都合に依り同所
南側今井定七氏方へ移す事となりしに付き同家へは下京區長、區書記、
及び氏子総代、神事掛等數名出張して嚴重に鬨渡式を執行し順次山鉾の
通行を初めたるが放下鉾に至りて忽ち四條新町の電柱の爲め凡そ三十
分間支へられしも稍やくにして通行し何れも滞りなく寺町、松原を経て
無事に夫れ／＼町内へ曳き返りたるは午後一時三十分より全二時三十分の
間なりしが斯く非常の雑沓を極めたるにも拘はらず負傷者は一人もなかり
しよし又た當日賀陽宮邦憲王、全御息所、及び久邇宮多賀王の三殿下も
下京區四條高倉東へ入る市原平兵衛氏方へならせられ右山鉾巡行を御一覽

あそ 遊ばされたるよし

〔27〕明治二十七年（一八九四）七月四日『日出新聞』

●山鉾の紛議落着（巡行に決す） 祇園祭山鉾の巡行費に關し清々講社と
鉾町との間に意見を異にし鉾町は本年に限り山鉾を曳出さざることに決せ
しが竹村藤兵衛、辻信次郎、杉浦利貞の諸氏は過日來種々調停に盡力し終
に一昨日午後七時より八坂神社々務所に於て講社幹事、各組正副社（組
長、鉾町委員等の大集會を催ふし昨日午前四時頃まで協議せし處随分種々
の議論起り講社幹事原田與市氏の如きは中途に退席したるも杉浦利貞氏等
は若し講社より補助費を支出し能はずんは自分一個より寄附してなりとも
例年通り神事を執行せざるべからずと論ぜし由なるが實際鉾町にては百圓
の補助を受くるも尚ほ二三十圓の不足を告ぐることに明白の事實なるを以て
結局本年は鉾町より金十圓づ、（九ヶ町より九十圓）を八坂神社に寄附
し同神社は此金を清々講社に交附して補助費に加へしめ講社より支出する
山鉾巡行補助費を二十圓づ、増額せしむることに決したり即ち補助の
割合は左の如し

長刀、函谷、月、鶏、放下鉾	百圓
上り観音、下り観音山	九十七圓
船鉾	九十五圓
岩戸山	九十圓

すなはち即ち何れも例年より二十圓づ、増額し其他の昇山及び弦召は増額の必要な
しとて昇山に十六圓づ、弦召に十九圓づ、交附することに決し神事執行の
順序を左の如く定めたり

七月四日鉾囃子稽古始○同五日吉符入○同十日神輿洗、鉾建○同十一

日鉾兒社参○同十四日山建○同十五日鉾曳初、闖取○同十七日山鉾
巡行、神幸○同十八日觀音山建○同廿一日山建○同二十二日曳初○廿四
日山巡行、還幸○同廿八日神輿洗

〔28〕明治二十七年（一八九四）七月十七日 『日出新聞』

●闖渡し 本日午前九時より例年の通り舊式に従ひ下京區四條高倉東入
南側中井某方にて祇園祭り山鉾の闖渡しを爲す筈にて辻下京區長、中山
平勢の両書記同家へ出張するよし

〔29〕明治二十七年（一八九四）七月十八日 『日出新聞』

●祇園祭 昨日は祇園祭り山鉾巡行の當日なれば天氣如何と心配せしに
前日來の暑氣燉が如き炎熱にて少しく西南の風を加へたり第一の長刀鉾を
曳出したるは午前九時五分にて近年までは必らず午前八時には曳出したる
も之れは大阪神戸より見物に來るもの一番瀟車よりは二番瀟車に多く又
大津より來るもの等概して午前九時比には進行地へ到着するよりは是等
の便利を計りしものなるべしと云ふ然し昨日大阪神戸より來りしものは
例年に比して少き方なりし其景況は相變らず雑沓の甚しきは四條寺町以西
東洞院にて山鉾の寺町を南に曲りしは恰も十時過にして晝飯の後の松原
通りを巡行し午後二時に長刀鉾は居町に歸り三時迄に他の山鉾も歸り去り
たり△下京區三警察の警官多人數出張あり從來闖渡場の如きは巡查の出張
なきも昨日は二名出張あり鉾には三名又は四名宛警衛し其他道筋の警衛
細密に行届けり△山鉾町々より隨行の町主は例年洋服多く見かけしが本年
は麻上下を着し一文字笠を被りたるもの多く保存的を見るに大によし

〔30〕明治二十八年（一八九五）六月三十日 『日出新聞』

●祇園祭 曩頃より或一部にては惡病流行につき同祭典を秋季まで延期す
べしとの説ありしが其後該病勢も増進の模様なく旁々延期の必要もなる
べしとて山鉾町々にては既に其準備をなし明一日吉符入をなし同夜より
集會所二階に於て祇園囃子の稽古初めを爲す由また兩三年前より出さざり
し白樂天山も本年は博覽會の餘興として成るべく曳出すこととせんと目下
當番幹事にて協議中なりと其神事順序は左の如し

七月一日吉符入○同十日鉾建○同十日神輿洗○同十一日鉾稚兒社参○同
十一日車掛○同十四日昇山建○同十五日鉾曳初○同十五日■番闖取○同
十七日午前山鉾巡行午後神輿神行○後祭（廿四日祭）同十八日兩觀音山
建○同廿一日山建○同廿二日觀音山曳初○同廿四日午前山巡行午後神輿
還行○同神輿洗

〔31〕明治二十八年（一八九五）十月十七日 『日出新聞』

●祇園祭り山鉾の抽籤 祇園祭り山鉾巡行の順番に付き例の通り昨日京都府廳
に於て半井社寺掛屬立會ひ鉾町総代登廳して抽籤したる處其順序左の如
し

長刀鉾、錦天神山、山伏山、占出山、函谷鉾、油天神山、木賊刈山、郭
巨山、鷄鉾、孟宗山、保昌山、太子山、月鉾、芦刈山、伯牙山、放下鉾、
岩戸山、船鉾、
北觀音山、辨慶山、八幡山、役行者山、鈴鹿山、鯉山、常明山、黒主山、
南觀音山

〔32〕明治二十九年（一八九六）六月十九日 『日出新聞』

●八坂神社の私祭 八坂神社にては例年の如く来る七月一日より左の日割にて私祭を執行する由尚ほ山鉾巡行の路筋は例年と同様なりと

七月一日 鉾囃子稽古始○同日 吉符入式○十日 神輿洗○同日鉾建○十一日 鉾稚児社参○十四日 山建○十五日 鉾曳初○同日 鬨取(十七日分廿四日分)○十七日 山鉾巡行○同日 御神幸○十八日 観音山建○二十一日 山建○二十二日 曳初○二十四日 山巡行○同日 御神幸○二十八日 神輿洗

〔33〕明治二十九年(一八九六) 七月十六日 『日出新聞』

●祇園山鉾籤順 祇園祭の山鉾巡行に付例の通り山鉾各町総代は昨日府廳に出頭し抽籤にて左の通り順次を定めたり

十七日 長刀鉾(籤取らず)、伯牙山、芦刈山、太子山、函谷鉾、孟宗山、占出山、油天神山、鶏鉾、木賊刈山、保昌山、山伏山、月鉾、錦天神山、郭巨山、放下鉾(籤取らず)、岩戸山(同上)、船鉾(同上)廿四日 北観音山(籤取らず)、橋辨慶山(同上)、八幡山、常明山、鈴鹿山、黒主山、役行者山、鯉山、南観音山(籤取らず)、又昨日は例の通山鉾の曳初めをなすことなりしが生憎雨天にて午前は見合せ午後に至りて行ひたり

〔34〕明治二十九年(一八九六) 七月二十五日 『日出新聞』

●祇園引山巡行 昨日は祇園祭還幸にて上下観音山を始として其他の山は午前九時三十分三條新町より三條通を東へ進み高倉西入川島甚兵衛氏方を籤改所とし辻下京區長平勢同書記畑上京區書記等出張し例の如く籤改を行ひ夫より順路列を正して各町々へ歸りたるは午后一時頃にて當日大津

おほさかうべそのなかくちらう
大坂神戸其他各地方より見物に來りしものも随分多かりし

〔35〕明治三十年(一八九七) 六月三十日 『日出新聞』

●祇園祭 八坂神社秋祭は例年の如く執行することとし全神社より關係警察署へ届出して喧噪なく成るべく静肅にすべしとの注意にて許可したればいよく明一日は各鉾町々 鉾囃子を爲し十日には鉾建十一日は鉾稚児社参十四日は山建十五日は抽籤及鉾曳初十七日は山巡行十八日は観音山建廿一日山建廿二日観音山曳初廿四日巡行にて神輿は十日午後九時神輿洗十七日午後五時神幸廿四日午後二時還幸廿八日午後九時神輿洗等なりと

〔36〕明治三十年(一八九七) 七月十六日 『京都日出新聞』

●祇園山鉾の籤取 祇園會山鉾の籤取りは例年の通り昨日各鉾町総代府廳に出頭し社寺係立會の上執行せり其籤順は左の如し

十七日
長刀鉾(籤取らず) 木賊刈山 太子山 保昌山 函谷鉾(籤取らず)
錦天神山 山伏山 伯牙山 月鉾 孟宗山 芦刈山 郭巨山 鶏鉾 油天神山 占出山 放下鉾(籤取らず) 岩戸山(同上) 船鉾(同上)
二十四日
北観音山(籤取らず) 橋辨慶山(同上) 常明山 鯉山 黒主山 八幡山 役行者山 鈴鹿山 南観音山(籤取らず)

〔37〕明治三十年(一八九七) 七月十八日 『京都日出新聞』

●祇園祭の景況 昨日は當地名物の一なる祇園祭なりしが夜來より蕭々と

雨降りそ、ぎ時々滂沱たる大雨となり山鉾町にては其混雑一方ならず
長刀鉾を初め鉾はいづれも後部に掲ぐる見送及び水引天幕等を箱に収め鉾
の後ろに従へる牛車に積み鉾の屋根及び四面は悉く雨合羽を以て覆載ひた
り又山棚も同じく四面戸張水引掛物の上に合羽を覆ひ見送は掲げず人形に
は合羽又は蓑を着せ芦刈山の翁は蓑に占出山の神功皇后は黒合羽を着け
白絹を以て頭部を覆ひたるなどとい異様なりしさて長刀鉾は午前十時に曳
出したるが山は一向來らず函谷鉾は山を待たず引出し其次に稍く山が来り
しも當籤番通りの順には揃はず最後の占出山は放下鉾の後となりしなど
不順序にて十二時頃に船鉾が籤渡し場所を通り巡行せしも雨中のことと
て小童丁稚の縄をひくものなく至つて寂寥を覺へたりまた巡行につき四條
通寺町通松原通新町通りはいづれも電燈線を切斷せしが電話は一刻も
中止すべからざるを以て全線は切斷せず爲に長刀函谷其他とも松原より
新町を経て午後三時より四時頃に各居町に戻りたり今日は降雨の爲め氏子
各家とも來客少なく婦人などは今日を曠れとせる夏衣を第二とせるが如く
なりし又雨天の爲め深く簾を垂れしが多く屏風の競争も尠なく却つて流行
の朝顔の我は顔に陳列せしが多かりし山鉾圖渡式は四條高倉東入青木某
方を式場とし下京區長以下出張して圖札を受取りしが占出山町の早川某は
其作法最も目立ちて見へたりといふ

〔38〕明治三十年（一八九七）七月二十五日『京都日出新聞』

●祇園祭 昨日は十七日に反し朝來快晴なりしかば大坂神戸大津奈良等よ
り來京者多く山鉾は午前九時より圖順の如く曳き出したるが十七日の雨具
装に比しては一段の見榮あり見物人は三條寺町より四條寺町の間最も多
く本年は三條東洞院東入る山中利右衛門氏方を圖渡場とし兩觀音山は

午後二時三十分頃其他は午後一時より三十分までの間に皆其居町に戻りた
り雑踏の割合には一人の怪我人をも出さざりき

〔39〕明治三十一年（一八九八）六月二十八日『京都日出新聞』

●祇園祭 祇園祭は例年の通り左の日取りにて執行することに昨日決定せ
り尚ほ近頃市内に電柱の建設日々増加し山鉾の通行に故障少なからざれば
其旨八坂神社より電燈會社へ照會せしに同社よりは當日差支なき様取計ふ
べき旨回答したる由

七月一日 鉾囃子稽古初○十日 鉾建、神輿洗○十一日 鉾稚兒社參○
十四日 山建○十五日 鉾曳初、山鉾圖取○十七日 山鉾巡行○十八日
觀音山建○二十四日 山鉾巡行○廿八日 神輿洗

〔40〕明治三十一年（一八九八）七月十六日『京都日出新聞』

●山鉾巡行の籤取り 祇園祭山鉾巡行の籤取は昨日午前府廳に於て社寺
掛立會ひ執行せり其列順は左の如し

十七日

長刀鉾（籤取らず）、占出山、山伏山、太子山、函谷鉾（籤取らず）、木賊
刈山、郭巨山、芦刈山、鶏鉾、錦天神山、孟宗山、保昌山、月鉾、油天神
山、伯牙山、放下鉾（籤取らず）、岩戸山（同）、船鉾（同）

二十四日

北觀音山（籤取らず）、橋辨慶山（同）、八幡山、鯉山、常明山、鈴鹿山、
役行者山、黒主山、南觀音山（籤取らず）

〔41〕明治三十一年（一八九八）七月十八日『京都日出新聞』

●祇園祭の當日 昨年の當日は雨天にて錦繡の粧具金銀の金物悉皆油紙に包まれて合羽の行列の哀れなるさまなりしが本年は天氣つゞきにて昨日は殊によく晴たる上に南西の薫風徐むるに吹送りに膚心のよろしきまゝ、朝來の人は實に夥多しく四條通りより巡行の道筋に至れば熱度は人氣の爲めに高くなりて寒暖計の度數を狂はずに足るべく見受けたるが家々にては常式の來客あれども他國の取引先より來たるものは例年より少なきやうにて此の頃は外國人も避暑を兼ねて入京するもの多きも本年は米西の戦争ありペストの流行旁平年の半數にも至らずといふ偕て山鉦は午前九時より渡り初めて祇園囃子は四隣を動かし鬨順にて寺町へ渡り來たるが鬨渡しの場所には四條高倉東へ入る今井方なりしかども同家は忌中にて同町の春木藤七方へ代り此夜へ片山下京區長は生形平瀬両書記を隨がへて出張し順次鬨渡したるが是れは渡り方は一種の古体を存し瞬間の動作にも頗ぶる體裁の可否あるものにて本年は一文字笠を取拂ふ文宮の紐の捌き方等占出山が第一なりしと噂さす市内下京區の三警察署は十一小學校を臨時集會所とし非番巡查も総出にて道筋へ配置し憲兵も非直とも総出にて警戒せり、先登の長刀鉦が松原烏丸に到りしは正午にて同鉦町は因幡藥師堂にて晝飯席を各山鉦は開智小學校及び松原の大丸、淨國寺、永養寺、法然寺等にて中食席とし順次居町へ復せしは午後二時より三時の間にありし、巡行道筋には數多の氷店ありしかども割合ほどの■へず山鉦の番附賣も左のみは賣行かずシャボン玉のみよく賣れしは子供に不景氣なき故ならん、此見物に他國より入り來るもの數をしらねど七條の停車場にて調査すれば午前七時三十五分全五十三分九時十三分着の乗客は六七分方祭禮の見物にて此の平均三千二百三人なるに昨日は四千七八百人を揚げたり此外奈良、嵯峨の両鐵道又は伏見の電鐵等多數の祭禮見物を運搬し來りし

由、此外來人の饗なし又は其他の見物客の饗なさるゝ、錦の店の賣行きは前年に比して減少し殊に鯖の不消化物は其需用大に減じたる全た衛生注意の結果なるべきも鯛鰻の類は左まで減じもせず各料理屋も相當の注文あれど赤飯は年々減少する体なり晚景になりて木屋町先斗町其他の床は先づ例年の如き來客なりと思はれたり

〔42〕明治三十一年（一八九八）七月二十五日 『京都日出新聞』

●祇園會と市中 昨日の祇園會は十七日の前祭に比しては稍寂しき觀なきにあらねど都第一の名物として市中は相應の出入あり山鉦巡行の町々は今日を晴れと表を飾り見物の男女土用五郎の炎熱焼が如きをも厭はず道の左右に居列びて黒山の如くなりし▲山鉦巡行 鉦は例年の如く北觀音と南觀音の兩曳山を前後に橋辨慶以下の山鉦午前八時三十分三條新町に打揃ひ■で練出して我社より少しく東なる三條通り高倉西入日本生命保險會社にて出張の片山下京區長生形同書記立會にて鬨渡式を行ひ夫より寺町を四條へ出て兩觀音山は新町に至りて其町に復し其他の山は東洞院より北に折れ電線の故障なき道筋を撰びて夫れく居町に復せしは午後一時前後なりし▲各料理屋 前年に比して注文の多少は差して異らざれども蛸鰻の類は割合に注文少なりし由尤も赤飯の注文は年々減する方なれど別て本年は少なかりしといふ▲瀛車 大坂其他近隣村よりの入込客相應にありしも本年は例年の如く祇園會見物の人少く鉦巡行の道筋にある家などは他府縣の取引先其他知人へ態々招待状を出だせしものもあれど之に應じて上京せしは皆無の様に七條停車場の如きは大坂よりの着車午前七時三十五分、同七時五十分、同九時三十分と平生に比して差したる乗客の相違を見ず然れば奈良鐵道京都鐵道も右同様の觀なりし▲市中の各商店其他は総

じて宵山より昨日にかけて可なりの賑はありしも市中一般に景氣好き方にはあらず鉾町は相應の人出ありしも反つて四條磧の方賑しかりしやの觀もあり祇園新地の如きも十七日の前祭も差したる相違もなく昨今の景氣柄先づ客は少き方にて藝妓の箱入なども餘り盛なる方にては無かりし但し最も利潤を得しは市内各所の氷店にて■のみは御祭り萬歳土用萬歳をうたひしなるべし

〔43〕明治三十二年（一八九九）七月一日『京都日出新聞』

●祇園會 八坂神社の私祭は例年の如く左の日取りを以て執行する由

七月一日鉾囃子稽古初、吉符入○十日鉾建、神輿洗○十一日鉾稚兒社参
○十四日山建○十五日鉾曳初、山鉾圖取○十七日山鉾巡行神幸○十八日
觀音山建○廿四日山巡行還幸○廿八日神輿洗

〔44〕明治三十二年（一八九九）七月十二日『京都日出新聞』

●山鉾の籤取 祇園會山鉾順行の籤取は例年本月十五日府廳に於て執行し
來りしが右は私祭の事にもありかた／＼本年より市役所に於て執行する事
となれりといふ

〔45〕明治三十二年（一八九九）七月十六日『京都日出新聞』

●山鉾巡行の籤取 祇園會山鉾巡行の籤取は既記の如く本年より市役所に
於て執行することと爲り各鉾町より總代二名宛昨日市役所に出頭し市長の
面前に於て抽籤の結果左の如く順番を定めたり尚ほ當日市長は一同に向
ひ祇園會は古來全國に名高く遠國よりも見物の爲め態々來京するもの少な
からず實に京都の盛衰に關係を及ぼすものなれば各鉾町にては平素成るべ

く冗費を節約して山鉾の修理保存に努めんことを注意したる由

十七日

長刀鉾（籤取らず） 芦荻山 孟宗山 郭巨山 函谷鉾（籤取らず） 木
賊山 錦天神山 伯牙山 月鉾 占出山 油天神山 保昌山 鷄鉾 太
子山 放下鉾（籤取らず） 岩戸山（同上） 船鉾（同上）

二十四日

北觀音山（籤取らず） 橋辨慶山（同上） 鯉山 常明山 鈴鹿山 黒主
山 役行者山 八幡山 南觀音山（籤取らず）

〔46〕明治三十二年（一八九九）七月二十五日『京都日出新聞』

●祇園祭 昨日は祇園私祭の還幸式にて北觀音山を初め其他の各山は午前
九時三十分三條を東へ進行し東洞院東入高田氏方にて上下京區長清々講
幹事出張して圖渡しの式あり終つて三條を寺町へ寺町を南へ四條に至りし
は午前十時四十分なりしが最終列なりし南觀音山の松が枝が三條東洞院
東入町にて電話線に支へられ通行困難なりし爲め南觀音山のみ遅延し
寺町三條にて列に追付たるよしにて列の午前十一時三十分四條通柳馬場
より寺町まで進行し來るや前刻より薄暗くなりし空模様は最早堪へずサツ
と南風の吹くと共に微雨を催ふし來りければ何れも進行を止め合羽を覆ひ
し有様は一種の奇觀にて橋辨慶山の牛若は紺の一反風呂敷にて雨を凌ぎ
くぬしやまの法師は蓑を被むり其他いづれも種々の合羽を以て人形を包みて雨
を凌ぎ午後一時三十分頃各居町に復歸したり通行の見物人は十七日の三分
一位にて殊に四條通に至りては雨催ふしの爲め頗る寥々とし辻々の氷店も
案外冷氣の爲め賣れ悪かりし午後神輿渡御の模様は欄外に記すべし

〔47〕明治三十三年（一九〇〇）七月十二日 『京都日出新聞』

●神興洗と稚子社参 祇園會神興洗に付一昨十日例年の如く神興庫を開き午後九時本社より神興一基煌々たる松火の光を先に南鳥居を西へ祇園町を西へ四條橋中央に到りて鴨川の水を灌くの水式あり十時過ぎ本社に歸り拜殿に安んぜしか同夜は非常の雑沓にして四條通りより祇園社内までは通行も六かしきほど群集なし川原の景氣もなか／＼賑はしかりしました昨十一日午後例の鉦の稚兒乗駕にて八阪に社参なし午後三時頃乙訓郡久世村駒形兒（騎馬）にて社参せしが朝來雨天の爲めにて通路は静閑なりし尚ほ來る十五日は市役所に於て山鉦の鬨渡しありといふ

〔48〕明治三十三年（一九〇〇）七月十五日 『京都日出新聞』

●祇園祭山鉦鬨取 正（昨）十四日午前十時より市役所に於て祇園神事山鉦町の総代二十餘名出席し莊林助役は山鉦巡行の順番鬨の抽籤を行ひたるが其結果は左の如し

▲十七日の部

●鉦の分 鬨不取 長刀鉦○函谷鉦○舟鉦○放下鉦○一番 鶏鉦

○二番 月鉦

●山の分

鬨不取 岩戸山○一番伯牙山○二番木賊刈山○三番油天神山○四番太子山○五番芦刈山○六番保昌山○七番孟宗山○八番山伏山○九番錦天神山○十番郭巨山○十一番占出山

▲二十四日の部

●鬨不取 上り觀音山○下り觀音山○橋辨慶山

○一番常明山○二番鈴鹿山○三番八幡山○四番役行者山○五番鯉山

○六番黒主山

〔49〕明治三十三年（一九〇〇）七月十八日 『京都日出新聞』

わかたけ

○小雨 降りたれど昨日の朝鉦は觀物人■集し諸國より來れるもの亦多く流石に天下祭の名は今も

○弘法 大師の筆ゴブランの織物幸いに雨も甚しからで見ることを得たり長刀の稚兒の美しいこと

○鬨場 での鬨渡し下京區長の出張長刀を除くの外麻上下で左の手に文函をさ々げ樂舞腰で進行く

○文函 文函の紐解く扇ひらいて雨を除ける爲めか風に散らさぬ爲めか蓋取た文函を覆うて行くもあり

○さま くなれど 皆手際にやるが自慢とのこと中京には樂舞の流行つたはつである今でも尚ほ

○歩の 運びから腰つき鬨渡して退き扇開いていざ鉦をやれ山を遣れと知らす處喝采がしたかつた

○一人 狂言師が此役を勤めたやうである殊に目立て見えたが■も却々お手際此■ことが京ぢや

○月鉦 の晝は應舉函谷鉦は今度景年氏が晝いた明治の晝工には明治に愧ぢぬ腕前があるか何うか

（後略）

〔50〕明治三十四年（一九〇一）七月二十五日 『京都日出新聞』

●昨日の山鉦 昨日の祇園祭還幸は朝來晴天にて官線 七條驛奈良線京都驛は午前九時前後着車にて参觀の男女數多來京し電車も爲めに群集せしが十七日に比しては少數なりしと觀音山を始め順次三條新町を繰り出

せしは午前九時三十分にて例の如く三條高倉に於て籤渡の式を行ひ寺町通を経て四條通に出でたるは十一時なりし而して富小路寺町間に駐り何れも中食を喫し午後零時三十分曳出し夫より順次居町に復したるは午後一時三十分なりし同日閑院宮兩殿下には三女王を誘はせられ午前は三條通高倉西入る川島甚兵衛氏方にて山車通行を御覽あらせられたり、近頃は盆栽の流行するより氏子家々に陳列せる盆栽は松、竹、石菖青楓、秋草の寄植など多く又家々に碁盤將碁盤の設けなきは殆どなく甚しきは一家に碁盤の三面も備へある家ありて遠來の賓客の模様は今年は到りて少き様子なりとぞ

『51』明治三十四年（一九〇二）七月十六日 『京都日出新聞』

●祇園會山鉾の順番 昨十五日午前九時より市役所に於て祇園會鉾、山町の総代出席し明十七日及二十四日の山、鉾巡行の抽籤を行ひ左の如く決したり

十七日の分▲鉾の部（籤不取）▲長刀鉾▲函谷鉾▲放火（下）鉾▲舟鉾▲岩戸山▲一番鶏鉾▲二番月鉾◎山の部▲一番錦天神山▲二番太子山▲三番山伏山▲四番油天神山▲五番伯牙山▲六番芦刈山▲七番占出山▲八番孟宗山▲九番保昌山▲十番木賊山▲十一番郭巨山
二十四日の分▲（籤不取）上り観音山▲下り観音山▲橋辨慶山▲一番鯉山▲二番八幡山▲三番役行者山▲四番常明山▲五番鈴鹿山▲六番黒主山

『52』明治三十四年（一九〇二）七月十八日 『京都日出新聞』

●昨日の祇園會 昨日の祇園會は午前六時頃には少雨ありて八時過までは天候も穏かならざりしかど九時頃より少しく晴れ來りたるより俄かに人出

を増し四條通りは勿論寺町松原等は道の両側に人山を築かざるなく各戸は樓上樓下共に人を以て滿され尚ほ屋上及火の見等へ上りて山鉾の順行を見るもの多かりし扱て午前十時頃より先づ長刀鉾を始とし山鉾は四條通りを寺町へ順行し四條通高倉東入處にて市役所の莊林助役、片山下京區長等出張し山鉾の圖を受取り夫れより順次順行し四條寺町角の曲る處にて意外に隙取り漸やく寺町松原の角に至る此處道筋甚狭隘にして殊に両側に共に電柱あり加ふるに既記の如く下水工事を行ひたる場所にて鉾の巡行は随分危険なればとて下水中一間毎に丁字形の突張を爲し土木吏員數名を出張せしめ大に警戒注意を加へ高辻に於て各鉾の囃子方を下し鉾の上には人無きやうにして量を輕ふし松原通りへ曲りたれども電柱電線の障害と道路の狹隘との爲めに約三十分間計りを要し正午に至り長刀鉾函谷鉾は通行せしも月鉾の通行する際降雨となり各山鉾は何れも飾りを取り合羽を着せ松原通りを無事通過し夫れ〴〵山鉾町へ歸りたるは全く午後二時過に及び危険なりと噂されし松原通りも全く無事に通過するを得たり▲久邇宮多嘉王殿下並女王殿下には四條通高倉東入寺田しげ方に於て御覽遊ばされ滞在中の喇嘛教貫主の一行は四條堺町東入下村方にて觀覽せしが月鉾より同教主へ粽三把を投與へしと又古社寺寶物取調出張中なる岡倉氏の一行は寺町四條下る大雲院に於て觀覽し美術上の視察を爲したる由▲其他多くの見物人は降雨の爲散亂せし結果は寺町及新京極の附近蕎麥屋、善哉餅屋、牛肉店、氷水店等大いに賑ひ何れの店々も人を以て埋め又新京極の各興行も一時に入場者を増加せりと又外國人等は四條及寺町通の各貿易店にて見物し各山鉾を寫眞に映し居りし▲七條停車場の景況は一昨日より昨日へかけ官線神戸大阪より割引往復切符發賣の爲め又奈良線は半減なりしより意外の來京者を見るに到り目下の旅客に比すれば

殆ど倍數なりし由▲當日放下鉾の稚兒は四條堺町停車中一時眩暈の兆ありし爲め冠を脱ぎて冷を取り直ちに快復せしと

〔53〕明治三十五年（一九〇二）六月二十九日『京都日出新聞』

●祇園會祭式日 祇園會に付來る七月一日より左の通り祭式を執行す

七月一日鉾囃し初○十日鉾建○十一日鉾稚子社參○十四日山建并に山鉾巡行順番圖取○十五日鉾曳初○十七日山鉾巡行○十八日觀音山建○廿一日山建○廿二日曳初○廿四日山巡幸

○十日神輿洗○十七日午後五時神輿神幸○廿四日午後二時還幸○廿八日神輿洗

〔54〕明治三十五年（一九〇二）七月十四日『京都日出新聞』

●祇園會彙報 祇園會占出山以下各山棚は何れも其町々に建設したり▲長刀鉾を初め各鉾は一昨夜より鉾の前後に杉形數百の獻燈を爲して祇園囃しの習禮を初めたり▲四條高倉東入市原平兵衛氏方に於て皇族方山鉾

通行御覽あるよしにて籤渡式場をも同家の前なる今井氏方に設くるよし▲明十五日午前市役所に於て山鉾巡行順番の抽籤を爲す▲既に四月大

清潔法施行の爲め床下の大掃除は毎戸行届きしが昨今猶ほ祇園會を好機とし再び掃除を爲す家も少からず

〔55〕明治三十五年（一九〇二）七月十六日『京都日出新聞』

●山鉾の巡番（いよく定る） 昨日市役所委員室に於て祇園山鉾巡番の抽籤を爲し左の通り決定せり

▲十七日の分

長刀鉾（籤不取）、木賊刈山、保昌山、伯牙山、函谷鉾（籤不取）、郭巨山、山伏山、太子山、月鉾、錦天神山、占出山、芦刈山、鶏鉾、孟宗山、油天神山、放下鉾（以下籤不取）岩戸山、船鉾

▲廿四日の分

北觀音山、橋辨慶山（以上籤不取）、常明山、鈴鹿山、八幡山、行者山、黒主山、鯉山、南觀音山（籤不取）

〔56〕明治三十五年（一九〇二）七月十八日『京都日出新聞』

●祇園會山鉾の巡行（其の景況） 前日來の雨模様も朝來驟雨一回にて漸く陰雲四散し神戸大阪大津等よりの來客にて七條停車場は意外に群雜し午前八時三十分着車まで數回の中過半は山鉾見物者なりし又市中近村より來集するもの多く也阿彌京都ホテル等に滞在の外國人三十名計りも四條寺町邊にて見物したた四條高倉市原氏方にては久邇宮御覽あり依て山鉾圖渡しし所も特に市原氏の前なる今井氏方となり下京區長以下區吏員等出張し午前九時より長刀鉾を初め既報圖番の如く順行し鉾の稚兒及び禿も恒例の式を以て鞆鼓を打ち祇園囃子の囃し方も老練者のみを以てしたり圖渡しは此圖を渡さざれば山鉾の通行を許さざる關門とて長刀鉾、占出山其他何れも古式を以て圖を渡し四條通を初め各道筋は往來混雜するを以て五條、塩小路署等の非番巡查總出にて嚴重の警戒を爲し十一時頃山鉾の一行は四條寺町に到りては是れより戻り鉾の囃子に改めて儀式を略し囃子方も壯年者と交代し長刀鉾は松原柳馬場に到りて駐め以下寺町佛光寺に駐めて何れも中食を終り午後一時再び曳き出して松原烏丸より昇山は烏丸を北へ居町へ戻り鉾は松原を西へ新町を北へ順次居町に戻りしは午後三時三十分なり

〔57〕明治三十五年（一九〇二）七月二十五日 『京都日出新聞』

●昨日の山（無事に終る） 前日來雨模様のため他より入込む人も少く再昨日の祇園祭宵宮の如きは暴雨の爲め街路も寂寥として献燈も皆軒吊りとなりしが昨朝に至りて天候一變し雨氣散じたれば神戸、大阪又は大津等より瀛車にて來京せしもの午前九時頃までは可なりありしも十七日に比しては淋しかりし同九時着の來京者の三條に達せし頃を見て三條通新町を東へ上り觀音山を初めとして鐵順の如く午前十時三條高倉西入（高橋氏）鐵渡所に到り渡鐵の儀を行ひ市役所西區役所吏員出張し清講講神事掛立會ひ曳山昇山は三條を東へ寺町を南へ四條を西へ上り觀音山の四條麩屋町に達したるは正午にて以下順次に駐まりて中食し午後零時四十分更に曳出し四條東洞院に於て四散し曳山の居町に復せしは午後二時頃なりし而して順行道路は警官の警戒にて太く雜沓せず亦被害者もなかりし模様なりし

〔58〕明治三十六年（一九〇三）七月十五日 『京都日出新聞』

●今日の遊覧

○神事法要 ▲囃子稽古 祇園鉦（十六日夜まで） ▲曳初 祇園鉦 ▲鬺取

山鉦順番 ▲盂蘭盆會（西本願寺は八月廿三日迄）〔後略〕

〔59〕明治三十六年（一九〇三）七月十六日 『京都日出新聞』

●山鉦の巡番（定まる） 昨日當市役所委員室に於て莊林助役立會の上祇園山鉦巡籤を爲したるが左の如く決定せりと

▲十七日の分 長刀鉦（籤不取）、山伏山、占出山、孟宗山、函谷鉦（籤不取）、保昌山、芦刈山、伯牙山、月鉦、木賊山、太子山、郭巨山、

鶏鉦、錦天神山、油天神山、（以下籤不取）、放下鉦、岩戸山、船鉦、
▲二十四日の分 北觀音山、橋辨慶山、（以上籤不取）、鈴鹿山、黑主山、役行者山、鯉山、常明山、八幡山、南觀音山（籤不取）

〔60〕明治三十六年（一九〇三）七月十八日 『京都日出新聞』

●昨日の祇園會（及宵山） 本年は連日の強雨の爲山鉦の巡行すべき道路の軟弱なるより其巡行極めて困難なるべしと思ひしに前日來快晴となりしを以て道路乾きて反つて地盤の硬くなりしは全く天の給物といふべく午前八時其の町々より山鉦を輓出したり此の巡行を見んとて官線及び奈良鐵は一昨日來乗客を滿載し來り四條通高倉東入る市原平兵衛方にては久邇宮同大木平藏方には賀陽宮王子の御觀覽あり其の他各商店は取引先の來客又貿易店には外國人の觀覽せしも少からず而して巡路は勿論各辻々殊に寺町四條角又は松原角の如きは其の雜沓明状す可らざるものにて各人家は階上階下共に觀覽者にて充滿し尚屋上の火見櫓に TENT を張りて見物する者もありたり當日の山鉦鬺受取所は四條通高倉東入る野村宗兵衛方にて爰には中山下京區長及び區書記氏子惣代等出張し渡しある鬺を受取り山鉦を檢査して巡行せしめたるが例年同巡行は約五時間を要すれど本年は一時間早く第一番の長刀鉦が四條寺町迄進行せしは午前九時三十分にして同鉦の松原東洞院迄巡行せし時は十一時三十分なりしが此の時最後の船鉦は四條寺町に達し各町々に復せしは午後一時前後なりし各山鉦中月鉦は何時もながら立派なるものにて放下鉦は一時屋根は白木なりしも一昨年黒に塗り本年は屋根裏等に箔を塗り破風其の他を本金塗となせしを以て一際目立つて見え又孟宗山は今回周圍の彫刻金物に何れも鍍金を仕替へたれば、眩き許りに美しくなりたり道筋の雜沓及び山鉦の警備は五條署

および塩小路分署の非番巡查此れに當りて非常を戒めたり▲宵山は十五、十六兩日中十六日の午後八時より十時迄は近來稀れなる人出にして四條通新町邊より四條大橋迄は殆んど立錐の地も無き許りにて一時同通りは人車の通行を止めたる位なりしが露店杯は割合に賣行悪く非常の好況を來せしものは氷水屋なりしと▲尚同祭に就ては豫て區役所より衛生上注意せしを以て赤飯鯖鮓杯の注文は極めて少く本年は赤飯を廢して菓子と與ふる家増加し爲に各菓子屋は各商號を焼入るゝの類多く衛生を利用して如才なく廣告せしもの多かりしと

『61』明治三十六年（一九〇三）七月二十五日『京都日出新聞』

●昨日の祇園會（其の景況） 一昨日は後の祇園會の宵宮なりしが今や見物に出懸けんとする頃生憎の降雨にて午後七時五十分頃に至り一層の大雨となり且つ雷電さへありしかば見物を見合せし者多く又既に出懸けし者は蜘蛛の子を散すが如く新京極の善財餅屋氷水屋等に逃込み爲に此れ等の商店は意外の大當りなりしと扱て昨日の當日も曇天の内に雷鳴さへありし爲大阪より來京せし客などは甚だ稀なりしやに見受けられ且つ空模様が悪しかりしを以て觀音山の輓出しは例年より遅れ三條新町を東に向ひし時は殆ど午前十時なりし三條東洞院東入北側高橋徳兵衛方を以て籤渡所とし上下京區長以下神事掛出張ありて籤渡を無事終り北觀音山の三條寺町近く列り南觀音山の三條堺町邊に列りし頃は驟雨來りしを以て各山は皆合羽を着せ雨は頓て霽れしも雨具の儘寺町を南へ北觀音山の四條の辻に列りしは正午前にて夫れより四條を西へ新町を北へ居町へ復せしは午後二時三十分なりしといふ

『62』明治三十七年（一九〇四）七月一日『京都日出新聞』

●本年の祇園祭 本年は軍國多端の際とて來月執行すべき祇園祭の古儀は如何と云ふ者もありしが既に稻荷、御靈、今宮等何れも例年通り執行したるを以て同神社氏子の團體たる清々講社にては愈々例年通り山鉦巡行神輿渡御することとなりたり其の諸式は左の如し

七月四日	鉦離子稽古初	七月十七日	山鉦巡幸
同 五日	吉符入	同 同	神輿渡御
同 十日	神輿洗	同 十八日	觀音山建
同 同	鉦建	同 廿一日	山建
同 十一日	鉦稚兒社參	同 廿二日	山曳初
同 十四日	山建	同 廿四日	山巡行
同 十五日	鉦曳初	同 同	神輿還幸
同 同	山鉦順番圖取	同 廿八日	神輿洗

然るに月鉦の新町四條辻の電話柱と電燈會社の電柱との間十二間あるのみにして破風十五尺ある月鉦は通行する能はざるより氏子総代より電燈會社へ其の電柱の移轉方に就き交渉中なりと因に電話柱は移轉する能はざる由

『63』明治三十七年（一九〇四）七月十六日『京都日出新聞』

●祇園會山鉦籤取 は昨日市役所委員會室に於て内貴市長立合執行したり其結果左の如し

十七日分（▲印は籤取らず）

▲長刀鉦	保昌山	占出山	山伏山
函谷鉦	油天神山	孟宗山	郭巨山

▲月 鉾 木賊刈山 伯牙山 芦刈山
▲鶏 鉾 太子山 錦天神山 放下鉾
▲岩戸山 船 鉾

廿四日分 (▲記は籤取らず)

▲北観音山 橋辨慶山 八幡山 鯉山
常明山 黒主山 行者山 鈴鹿山

▲南観音山

〔64〕明治三十七年 (一九〇四) 七月十八日 『京都日出新聞』

●祇園會山鉾巡行 不景氣中なるも遺は祇園會にて特に旅順陥落は此の祭日中にあるべしとぞ氏子の意氣頓に昂れるよしなるが大坂神戸より一昨夕の宵宮をかけて娘子供中 には藝妓を連れて京都驛に着せし往復切符一千人餘ある上昨日は晴天にして西南の風ありしかば午前七時、九時、五十七分着の三列車にて來京するもの意外に多く爲めに構内人力車は殆ど出切となり木屋町四條行の電車は各車共乗客を滿載し奈良線も午前七時八時十分の両着車の混雑せるを見たり扱て鉾の引出時刻は年々一定せざるが昨日は午前九時にして四條高倉東入南側青木周一方に設けたる鬨渡所に 市長代 莊林助役中山下京區長平勢同庶務課長其他神事係等立會ひ籤渡 (前日市役所にて抽籤せしもの) 式を了りしは十時四十分なり例年四條高倉市原氏方には高貴の御方の御成あり四條通寺町通には貴紳の觀客あるも昨日は之を見ず十一時卅分頃には長刀鉾は寺町松原を廻り富小路邊にて休息し以下寺町佛光寺邊の間にて休息し中食を了り午後零時卅分には長刀鉾東洞院松原に到れり夫より順次山鉾居町に復せしは午後二時より三時前後の間なりし沿道の觀覽者は堵列し所轄警察署は當非直

巡查をして夫々雜沓を制止せしめたるが氷屋始め際物師は其間を縫ひ廻りて聲を囁らし居たるも買人は少なく中にはア、と吐息せしも見受けたりと

〔65〕明治三十七年 (一九〇四) 七月二十五日 『京都日出新聞』

●後の祇園會 一昨日の宵宮は丁度宵山見物に出掛んとする頃より生憎の降雨ありて電光さへ閃きたれば頓に入出を途絶し四條川原新京極を初め観音山其他居町の附近に待設けたる氷水屋其他の露店は意外の冷況を示したり扱昨日の當日は朝來曇天にて前日の如く蒸暑く北観音山以下新町通に序列せしは午前九時過にて夫より順次三條を東へ進み籤渡所は高倉西入川島甚兵衛氏宅に設け平勢下京區役所庶務課長區長代理として神事掛出張し各籤渡式を終り北観音山以下寺町通を南へ四條を西に折れんとする十一時頃盆を覆す如き大雨あり南北両観音山は屋根に合羽を覆ひはしべんけいませうめうやま 鈴鹿山等の大なる人形は何れも合羽を被せ行者山、鯉山、橋辨慶山、浄明山、鈴鹿山等の大なる人形は何れも合羽を被せ行者山、鯉山の人形は長持に納めたり例年は東洞院まで順行し夫より各山棚居町に還るべきは雨の爲め柳馬場邊より北に折れて思ひく正午前後に居町へ還りたり南北両観音山の居町へ還りしは午後二時頃なりし例年三條通寺町以西に於て高貴の方々の觀覽あるも昨日は時節柄斯ることなく又滯京中の外國人の見物は彼此少からざる方なりしと昨日山棚巡行中に好評なりしは北観音山の囃子の調ひたると囃人衣裳の古風にして南観音山の囃人の衣裳の時局に當たるとなりとか

〔66〕明治三十八年 (一九〇五) 七月一日 『京都日出新聞』

●祇園會 祇園會や錦の上の京の月、と詠まれたる京自慢の一つなる八阪

神社の私祭祇園會もいよく近付きて例年の通り来る十七日神幸同廿四日還幸の次第なるに依り今一日以來執行する行事は左の如しと

七月一日吉符入祇園囃し稽古初○十日鉾建、神輿洗○十一日稚兒社参、鉾車掛○十四日山建○十五日鬨取、鉾曳初○十七日山鉾巡行、神輿神幸○十八日上下観音山建○廿一日山建○廿二日観音山曳初○廿四日山巡行、神輿還幸○廿八日神輿洗

〔67〕明治三十八年（一九〇五）七月十五日『京都日出新聞』

●山鉾の抽籤と曳初 祇園會の山鉾の巡番は本日午前市役所に於て抽籤あり午前九時頃より曳初めの式あり又昨日は十七日巡行の山を建てたり

〔68〕明治三十八年（一九〇五）七月十六日『京都日出新聞』

●祇園會山鉾の籤取 昨日午前七時當市役所にて山鉾の列順の抽籤を執行し西郷市長より夫れく番號書を交付したるが其の順番は左の如し占出山は早ければ懐胎せるは喜ぶなるべし

▲十七日の分 鉾一番（月鉾）同二番（鶏鉾）山 一番（郭巨山）二番（占出山）三番（山伏山）四番（錦天神山）五番（牛天神山）六番（芦刈山）七番（保昌山）八番（太子山）九番（伯牙山）十番（木賊山）十一番（孟宗山）

▲二十四日の分 山 一番（常明山）二番（役行者山）三番（黒主山）四番（八幡山）五番（鯉山）六番（鈴鹿山）

〔69〕明治三十八年（一九〇五）七月十七日『京都日出新聞』
鉦の音 ■■■

●祇園會の山鉾の中、鬨取らずの長刀鉾の破風には、舞樂の「振鉾」の曲の人形が飾りつけてあるが、誰れが凝らした意匠かは知らぬが甚はだ面白い、一鉢此「振鉾」といふ曲は、舞樂を演ずるに當つては必らず第一番に演ずる定めなので、其曲の人形を第一番に曳出す鉾に飾りつけたのは中々趣向だとは某樂人の話である。

●山鉾巡行の中で一番雅味のある所作は、アノ鬨改めの式である、袴の股立ちを取つた若い男が、意気揚々と文箱様な物を眼よりも高く指しあげて見せる、それには鳥渡式があるので、僕は何時でも此式に狂言の趣味が含まれてあるやうに覺へて居る、さるにても此日鬨改めの爲出張の吏員が麻社杯で御出張になれば、定めて調和が良いだらうに。

●祇園會の表面は如何にも優美で、數々の屏風を引廻し、蘭燈の影淡く涼しげなる坐敷に、團扇を手にくすものを着た妙齡の娘さんが据つて居る處はさながら繪の様であるが、仔細に裏面を観察すると、深窓に養はるゝの婦人が、此祇園會に宵山を見に行くと稱し三々五々遊びに出ては、甚だ妙でない一果を残す事が少なくはないとの噂で僕が未だ十五前後の頃宵山を見に行くとて家を出ると、お婆さんが淫亂祭などを見に行くのぢやないといつても叱かれたのであつたが、其後曖昧宿の話等を聞ても祇園會は夏季中第一の大紋日であるといふた事を耳にした、さりながら目下はそんな淫鼻（卑）な事はあるまいが、さりとして幾分か俤は残つてないにも限られぬだらう。

●祇園會程店頭飾り附に意をつけて各家互に競争する私祭はなからう、屏風の事は■て言はず、生花や盆栽や■見て歩るいても面白い、四五年飼■ら生■は未生流と■流とが多く、盆栽■左■■■はなかつたが、一年其流行の盛んなるに連れて、盆栽を置く家が多くなつたが、本年は貸

盆栽屋等が澤山に出来たから、殊更多くなつたであらうと想像される。

「70」明治三十八年（一九〇五）七月十八日『京都日出新聞』

●前の祇園會（其の景況）

昨日は前の祇園會なりしが一昨夜ばらく少雨ありたれど昨朝は晴渡り賑しく暑き祭なりしが今其の景況を記さんに

▲山鉦巡行 午前九時山鉦を曳出したるが鬨渡所は四條通高倉東入青木方に設け市役所より河村助役、下京區役所よりは中山區長、平勢書記出張して鬨を受取りたるが巡行は非常に捗取り最後の船鉦が鬨を渡せしは十時三十分にて既記の道筋を経て正午には松原東洞院より柳馬場の間に休憩して稚兒以下参列者は高倉通松原下る長光寺にて晝食を爲し午後一時再び巡行を始め二時過各居町へ復したるが例年寺町松原邊迄行けば山中所を抜けしものありしが本年は之を禁じたり△四條通高倉市原方にては例年高貴の方御觀覽あらせられしが昨日は一方をも見受けざりしが西郷市長は新任後始めての事として此家にて觀覽せり△本國寺収容の俘虜七名は殊に山鉦の鬨渡式を見たしと申出でしより鬨渡所にて觀覽せしめたり△觀覽者は昨年に殆ど倍せる觀あり町々の辻々は言ふに及ばず道筋の各戸に溢れしが神戸、大阪、大津邊よりの觀覽者も多く賑ひたり、外人の觀覽者も京都、也阿彌、都ホテルの滞在者五百餘人以上も居れば從つて多かりしが諸國より冬物仕入れの客の上京せる者多きも賑ひし一原因なり

▲神輿渡御 本社にて早朝遷座の儀あり三基の神輿は午後五時過神幸道より祇園町、繩手を三條へ河原町を経て午後八時頃四條御旅町の御旅所へ着座ありたり

▲一昨夜の宵山 例年は十二時過ぐる頃迄は人多きに本年は十一時頃に

は最う歸る人計り、ズント大水が引きし如く寂しくなりしが全体に出入は少かりし△店頭装飾は何か年々歳々同じ風なりしが悉皆舊の儘にはあらず屏風、衝立を置きし外に自家の商品を巧みに陳列したるが所々にありしは是等を二十世式の裝飾法とでもいふべくや△屏風は到底量に於ても質に於ても二十四日に敵する能はざるが記者の眼に留りて涼しく裝飾されしは寺町通にて佛光寺角の近藤、四條下る藤川、株式仲買の曾野に南畫協會の本部と茶器賣る家との五軒△四條通にては丸平の小兒遊戲の屏風、紅平の競馬の屏風等依然人眼を惹く△烏丸四條上る井上といふ木綿商の表にありし青銅の水盤に九十九草が入れてありしが記者の見たる生花中の逸品のやうに思はれたり△本年は盆栽の陳列が多からんと想ひ居しが昨年より少なくなりし奈何しても生花の方が勢力がある譯なるべし△文金島田で濃厚粧りの所謂京娘が段々少なくなつて行き例のハイカラ巻多くなりたりまた宵山といへば二三年前迄衣裝競べの如き觀ありしが本年は浴衣姿の者多かりし、鬨と釣合を取れるにや、恁く京風の娘少くなれば舊式の表飾りと調和が取れぬ事となれば何とか一工風を要すべし、さりとて寺町通の某家のやう金庫を見せたるもあんまりなり△頭と帶の元祿姿の娘は七八人見受たり△遊廓は祇甲と先斗町とは餘程忙しき模様なりしが其他の遊廓は左程にもなかりしやうなりし

▲雜況 一般に料理屋の注文多く錦の魚市は素人筋への賣行は多からざりしも料理屋向の魚は頗る捌けたりといふ、鯖の鮓の注文一年減ずるは衛生思想の進歩せる爲めならんが赤飯の注文昨年より二割増加せるといふは景氣の恢復したる爲めなるべきか

「71」明治三十八年（一九〇五）七月二十五日『京都日出新聞』

●後の祇園會（其の景況）

昨日は後の祇園會なりしが中京の祭とて幕を張れる家々の飾りの忽かなるはなく美しく着飾りたる娘子供達の遊ぶさま京は何處迄もゆかし

▲山巡行 朝來晴曇定まらず微雨さへ時々降りければ一般の參觀者少かりしが北観音山以下三條新町に整列せしは午前九時三十分にて三條通

高倉西入川島氏方に設けし鬺渡所にて川村市助役上下區長清々講神事掛し出張し鬺渡を終りしは午前十一時前なりしが順次寺町を南へ四條に至りし

は十一時五十分にて同所に於いて休憩晝食を了り零時三十分より曳出し四條を西へ新町を北へ順次居町に復せしは午後二時過なりし▲北観音山の

屋根に三人登りて電線に松の触れざるやう注意しつゝありしが中の一人は絶へず巻煙草を燻らし灰をドシ／＼屋根に拂ふより警官の遂に注意したる

も可笑し▲三條麩屋町の高橋の二階に京都ホテルの外客令嬢等數名見物せしが中に風琴を祇園囃子に合して樂むるもありし▲屏風は三條通

東洞院より新町迄に随分逸品多かりしが其中にて變つてゐたるは草川の百福一雙なりし▲屏風陳列方法の變り居しは三條の出雲寺書店にて東手の

硝子戸の嵌つた中に立てた所さながら美術館に異ならず▲碁、將棋盤は不相變澤山に置いてあれど其割合に上等の盤少く、立派な屏風、花の如き

美人と相對して大いに調和を欠▲後の宵山一昨夜は昨年とは人出が総体に少く又其散り方も十七日よりは足が早かりしが鉾はなき代り屏風は十七日

の折よりもズント多くなつた逸品も多き事は言ふ迄もなし引括めていへば金地に墨繪のが多かりしやうにて無地のは少かりし▲盆栽生花も少なり

しが其の代り昨朝朝顔を陳列せる家が其所此所にありたり生花には池坊の立花を多く見受けたり▲店頭

の裝飾は年々歳々同じ事なれども椅子、卓子室内扇風機を備附けたる位が變つてありたり

〔72〕明治三十九年（一九〇六）七月十三日 『京都日出新聞』

●山鉾巡行抽籤日繰上 祇園祭十七日の山鉾巡行の抽籤は例年來る十五日市役所内にて執行せしが本年は同日が日曜日に相當するより本日に繰上げ執行する事となれり

〔73〕明治三十九年（一九〇六）七月十四日 『京都日出新聞』

●山鉾の籤取 祇園會山鉾の籤取は例年十五日なるも同日は日曜日に當るより昨日に繰上げ午前十時より市役所に於て川村助役立會ひ執行したる結果其巡行の順序は左の如くにて占出山の後になりたるには産を氣遣ふ時代遅れの婦人達もあるべきか

（▲印は籤取らず）

▲十七日の分 ▲長刀鉾、伯牙山、保昌山、郭巨山、▲函谷鉾、太子山、

孟宗山、油天神山、鶏鉾、錦天神山、占出山、山伏山、月鉾、木賊刈山、

芦刈山▲放下鉾▲岩戸山▲船鉾

▲二十四日の分 ▲北観音山▲橋辨慶山、鯉山、役行者山、鈴鹿山、常

明山、八幡山、黒主山▲南観音山

〔74〕明治三十九年（一九〇六）七月十八日 『京都日出新聞』

●前の祇園會 宵山も雨に潰れ昨日も降雨を免れずとの測候所豫報なりしも流石は祇園の神の御威徳にや昨朝に至り嘔吐きし程の晴天となりしより朝まだきの午前七時頃より既に市中はざわつき出して四條通を指して東西南北より往き來ふ人蟻の甘きにつくに異ならず▲山鉾巡行の道筋に當れる町々家々にては例の金屏銀屏に青簾幔幕など打繞らし花毛氈さては藤筵布きつめし店頭はよき人を以て埋め柵外にも山鉾見る人の立てるあ

り▲長刀鉾を曳出したるは午前八時三十分頃にして巡行は割合に早く船鉾の籤渡所を過ぎたるは十時三十分頃四條寺町の角にて八阪神社を遙拜し、慥く長刀鉾の松原を廻り戻り囃子となりしは十時頃なり、正午には例年の如く暫時休憩の上無事に各鉾町へ歸りしは午後三時頃なりし▲山鉾見物に近在より来る人、七條、京都の兩驛に下車する人、電車も四條に下車する者頗る多くそれ等の入々の巡行済みてよりは、大抵新京都に練込みたる事とて随分と雑踏し氷店、うどん屋、十錢まぶし、小料理店などに這入る人も多く見受たり■午後四時過ぎよりは神輿の渡御を見んとする人人の粧ひを凝らして八阪神社、新京都極に集ひ来る人多く四條、先斗町の床など夕暮より灯の影、人の賑ひ▲八阪神社にては午前五時遷座の儀あり、午後五時に至りて行装美々しく順路御旅町に渡御なりしは暮早早にて茲に二十四日迄駐御ある事例の如し夜に入つて其附近の景況は又非常なものにて祇甲、先斗町、木屋町邊りにて絃歌湧くが如きを見受たり

『75』明治四十年（一九〇七）七月十日『京都日出新聞』

●祇園會の鉾立と神輿洗ひ 去る一日より摺鉦、太鼓の祇園囃子の稽古の音各鉾町に賑はしく聞えたる祇園會も早や今日が鉾立てとなりて午前中は各鉾町に出入の手傳が姿勇ましく夜に入ては神輿洗ひに一基の神輿四條橋の上迄渡御ありて式あり、新京都極などは當月中の書入日なり、偕明日は鉾稚兒の社参にて紅提灯の火影美しき薄化粧の童子もありぬべく十四日は山建十五日は鬨取、午前中に鉾の曳初めあり、十三日頃より鉾の上には囃子の音賑はしく見る人群集するも別けて十六日は前の宵山とて一層混雑すべく殊に屏風陳列と生粹の京美人の陳列とは祇園會の名物、十七日は前の祇園會とて朝は山鉾の巡行に道筋は人の山を築き午後は神輿御旅所へ

とぎよ渡御ありて八阪神社より御旅所へかけて雑踏すべし、それより左記の如き後の祇園會ありて二十八日の神輿洗ひ迄先は本日より此月中は新京都極、四條、先斗町の床などは雨なき事を祈るなるべし、後の祇園會の順序は十八日（観音山建）二十日（山建）二十二日（観音山曳初め）二十四日（山鉾巡行、神輿の還御）二十八日（神輿洗）

『76』明治四十年（一九〇七）七月十六日『京都日出新聞』

●祇園會山鉾の順番 一昨日山建昨日曳初めをしたる祇園會の山鉾は例年の通昨朝九時市役所に於て鬨取を行ひたるが其の結果順行の次第左の如し▲十七日の分 長刀鉾（籤不取）保昌山、油天神山、伯牙山、函谷鉾（籤不取）錦天神山、芦刈山、孟宗山、鷄鉾、木賊刈山、郭巨山、太子山、月鉾、山伏山、占出山（以下籤不取）放下鉾、岩戸山、船鉾▲二十四日の分 北観音山、橋辨慶山（以上籤不取）常明山、鯉山、役行者山、八幡山、鈴鹿山、黒主山、南観音山（籤不取）

『77』明治四十一年（一九〇八）七月十六日『京都日出新聞』

●祇園會山鉾の順番 京のお祭中で最も優美なといふ祇園會は去る十日が鉾建、十四日が山建、昨日は曳初めとして同夜から宵山の祇園囃子の音も賑はしく夜の十二時頃迄の各鉾町は肩摩、轂撃の出入、明十七日は愈々山鉾の巡行、それに就て例年の通昨日市役所に於て山鉾の鬨取をした、其結果と鬨取らずの山鉾と合しての順番は

▲十七日の分 長刀鉾（鬨不取）山伏山、伯牙山、占出山、函谷鉾（鬨不取）油天神山、木賊刈山、孟宗山、鷄鉾、芦刈山、太子山、錦天神山、月鉾、保昌山、郭巨山（以下鬨不取）放下鉾、岩戸山、船鉾

▲二十四日の分 北観音山、橋辨慶山（以上闡不取）鈴鹿山、鯉山、常
明山、八幡山、役行者山、黒主山、南観音山（闡不取）

尚右祇園會につき今、明の両日鐵道作業局にては神戸、三の宮、大阪、
馬場、大津の各驛より京都驛間の往復二引（割）割（引）の切符を發賣す
る由

〔78〕明治四十一年（一九〇八）七月十八日 『京都日出新聞』

祇園會の賑ひ

▲雨中の宵山

▲山鉾の巡行

十六日の宵山も又出盛りの時間に鳥渡雨が降つて其雨中に祇園囃子の音
を聞いたのは興があつた、間もなく霽れて美しい星の光を見たが雨に出足
を止められて出ず了ひにした人も澤山あつたであらう、お蔭で大分に利益
を流され升たと溢したのは氷水屋計りではなかつたであらう、折角人に見
せやうとて立派に屏風を飾り立てたのにと人にはいはいないけれど其色は
主人の顔に出てあつた、店頭装飾は茲に三年以前から餘程趣きを替へて
西洋趣味が這入た様である敢て蓄音機や洋草の挿花ばかりでなく総体に
装飾に西洋式が加味されて來た。

屏風は例年何處の中には何と決つたものが出してあるから省いて、装飾
に盆栽を用ひた家が多い、眞柏、柳、青楓、櫻の根洗ひなどが多く草もの
は餘り見受けなかつた挿花には左したる變りはなかつた、道行く婦人を見
ると大抵は三圓は四圓の浴衣に羽二重紋り式と色縹子の晝夜帯を締
めて居る上布だとか帷子などを着て居た人は極僅かだ、尤も當夜は涼しか
つた加減もあつたらうけれど……それから下駄が総体にお粗末だ、一体

京都の女が後の減つた悪い下駄を履くのは有名なものだが近年総ての点に
於て贅澤となつてから少しはよくなつたかと思つたが奈何もハヤ……。

諸昨日は山鉾の巡行である、風ソヨソヨと割合に涼しかった上時々曇つ
たから山鉾見物の人は餘程多かつた、巡行の各辻々などは人の山を築いた、
道筋に當る家々は見物の人鮎を詰めた様に据り、寺町通東側の寺の表な
どを借て棧敷をかけて一人前何錢かで客を入れて居た事は例年の通、松原
の大丸呉服店では表に竹柵を施してお得意先の人を迎へ屋根には
寫眞機を据へて鉾の來るのを待て居る

長刀鉾を曳き出したのは九時頃であつたらふ松原を廻つたのが十時頃で
船鉾が寺町を廻つて了つたのが十一時頃であつた、闖取らずはズン／＼と
進み闖を取る山鉾は一一古雅な闖改めの式をして行く、占出山が三番にな
つたので人形が嬉しさうな顔をして御座ると二十七八の女が連に話して居
た午後の二時頃には鉾も山も取片附て了つて其町々の人はヤレ／＼といつ
た風、湯にでも這入て神輿の渡御でも見に行く人もあらう

黄昏からは祇園町は美しかつた、晝は山鉾の袋飾などに稀代の古美術を
見た眼は夜に入て活きた菩薩を見た、右往左往の盛粧したる藝舞妓が媚を
作つて歩いて行く姿は如何な石部金吉でも艶に見へるだらふ、況んや凡夫
に於てをやで神輿を見るのを外にしてソコ／＼と何處かへ姿を隠して赤い
顔を風に吹かせて歸るのも無理はない、さういふ連中が至る樓上に太鼓を
叩き三絃を弾かせて居る、それでも今年は寂しいと或る男衆が話しつゝ行
つた。

八阪神社からは七度半の使が弓矢町に立つ弦召が揃ふ、洛西久世からお
稚兒さんが来る、行列が美々しく練出して縄手を三條へ、三條を河原町へ、
河原町四條を御旅所へ着御になつたのは十時頃でもあつたらう聴て數々の

お供物が飾られる、参詣の男女が頗る多い、お参りをした足で四條磧、新京極などをブラついた人は罪がない方で罪のある者は木屋町、祇甲、先斗町、宮川町などへ浮かれ込んだであらう

〔79〕明治四十二年（一九〇九）七月十一日 『京都日出新聞』

●山鉾の順番 京のお祭の中で優雅なのは春の葵祭りであるが優美と艶麗とを兼ねたのは祇園祭りである例年の如く昨日市役所で山鉾巡行の圖取があつたが

▲十七日の分 長刀鉾（圖不取）、函谷鉾（圖不取）、鶏鉾、月鉾、保昌山、山伏山、霰天神山、蘆刈山、郭巨山、伯牙山（以下圖不取）放下鉾、岩戸山、船鉾

▲廿四日の分 北観音山、橋辨慶山（以上圖不取）鈴鹿山、八幡山、常明山、鯉山、黒主山、役行者山、南観音山（圖不取）

占出山が後ろになると産が重いと傳説があるが昨年は四番目だったのが本年は九番目になった、傳説が事實とすれば本年のお産は昨年より稍重いかも知れぬ

〔80〕明治四十三年（一九一〇）七月八日 『京都日出新聞』

●祇園會のさまく 「鉾の稚兒群集に酔もせざりけり」と一茶が言つた京都名物の祇園會も目の前に近づいた十日の神輿洗や鉾建からの行事を記すと十日神輿洗、鉾建、長刀鉾車掛式を行ひ午後三時より四條を高倉迄曳初めを行ふ、十一日鉾稚兒社参、十四日山建、十五日鉾、山の圖引を市役所にて執行、午後各鉾の曳初あり月鉾函谷鉾長刀鉾を四條柳馬場迄曳く十七日神輿の渡御、山鉾の巡行あるが鉾は例年の通り四條を寺町へ寺町

を松原へ松原を新町へ新町を四條への順路は言ふ迄もなし十八日観音山建廿一日山建、廿二日観音山曳初、廿四日山巡行、廿八日神輿洗の如くであるが本年は沿道に瓦斯管を布設した爲め三千貫の山鉾が巡行する時は地盤が如何かと気遣はれて巡行をせんとかせんとかの問題が起つてゐるが名物でもあり京都の行事であるから多分巡行することになるならん

〔81〕明治四十三年（一九一〇）七月十日 『京都日出新聞』

●山鉾巡行中止決議

天正九年より昨明治四十二年に至る三百有餘年間例年七月十七日と二十四日の両日八阪神社の私祭に際し所謂祇園會と稱し山鉾の巡行をなし來りしも本年は其巡行の道筋に京都瓦斯會社が鐵管を埋設し未だ舊態に復せず爲めに三千貫以上の重量ある鉾を巡行せしむるは甚だ危険なりとして過日來各鉾町にては寄々協議をなし八阪神社の清々講社幹事亦之に参加して市役所又は瓦斯會社に向つて頻りに交渉を重ね居たることは連日の紙上に報道する處ありしが一昨夜各山鉾町にては最後の集會を催ほし種々凝議の結果愈々本年は斷然中止すること、なり昨日鉾の當番總代四條室町西入月鉾町高橋彦太郎、山の當番總代綾小路新町西入矢田町服部傳次郎兩氏の連署を以て来る十七日及二十四日の祇園私祭には道路危険の爲め本年に限居とし山鉾巡行を爲さざるに付山鉾圖取は見合相成度旨を市參事會市長に届出でたり、其理由は言ふ迄もなく瓦斯鐵管埋設の爲めなるも長刀鉾町にては寺町四條角は目下瓦斯會社が道路掘割中にて到底寺町へ曳曲ぐることはざるも其處までは曳出すべしと主張したるも他の鉾町は短距離のこと、て動くことは尚鉾の舞臺の上には稚兒其他離子方等多數乗組み而かも是等の人々は何れも中以上の商家の子弟なれば父兄等が

危険なる道路上を曳廻る鉾に乘組むことに氣遣ひ許可せず爲めに肝心の
囃子方一同拒絶したれば縦し曳出したりとて囃子方の乗組まず眞逆に
落語家や俄師を乗組ませて囃さしむることもならず旁々中止したる次第な
りと然るに市土木課にては清々講社幹事高階新助、半井安兵衛二氏の交渉
にて一昨日瓦料(斯)會社の技師を立會はしめ三千五百貫の重量試験を行
ひたるに毫も危険を認めざりしが山鉾町は其結果をも聞かずして闖取見合
せの届出でをなしたるにぞ市役所にては前記の総代兩名を呼出し試験の
結果を申聞け且つ數百年來執行し來りたるを俄然中止するは一惡例を遺す
のみならず市の繁榮を阻害するものなれば例年通り曳出す様諭告し若し強
て中止せんとせば既に八阪神社宮司氏子総代より例年の通り祭禮執行の旨
届出居れば之が闖取見合せの儀も宮司及氏子総代より提出すべきものに
て單に山鉾町総代より届出づべき筋合にあらずと指示したるに兩名の総代
は何分鉾町の決議に依つて届出でたるものなれば一應協議を爲すべしと述
べて引取りたりと云ふ

〔82〕明治四十三年(一九一〇)七月十四日『京都日出新聞』

●山鉾順番抽籤執行 祇園會の山鉾巡行中止問題は屢記の如く市役所
又は清々講社幹事氏子総代等當番行司を始め各鉾町行司等に種々勸告交渉
の結果、函谷、鶏兩鉾を除く外は例年の通り曳出すことに協議纏まりた
るに付更に當番行司より曩に提出したる中止の届を取消し巡行の旨を十三
日市參事會市長に届出たるを以て愈々明十五日午前九時より市役所に於て
山鉾巡行順番の抽籤を執行することとなりたり尚函谷、鶏兩鉾も多分
昨夜中には圓滿に協議纏まる見込ありしが若し不調ともならば右を除外し
抽籤に加へざる由

〔83〕明治四十三年(一九一〇)七月十七日『京都日出新聞』

●本日の山鉾巡行順

函谷鉾竟に動かず

本年に於ける祇園會山鉾抽籤の結果は既報を経たるが本日の巡行順は例年
の如く鉾の間に山を挟て左の如き順番となれり

長刀鉾。霞天神山。太子山。芦刈山。月鉾。郭巨山。木賊刈山。山伏山。

鶏鉾。油天神山。保昌山。孟宗山。放下鉾。伯牙山。占出山。岩戸山。

船鉾

尚ほ巡行未決定の函谷鉾は頑として當初の主張を飜さず昨日の宵山には
花々しく囃し立てたれど十二時過ぎより一切取片附に着手し本日巡行すべ
き他の山鉾の妨害にならざる様にせりといふ

〔84〕明治四十三年(一九一〇)七月十八日『京都日出新聞』

●前の祇園會

山鉾巡行の壯觀

沿道は非常の雑踏

京の祇園會と言へば四月の都踊五月の葵祭十月の時代祭と共に華都自慢
の一つである昨日は夜來の雨で今年の祇園會はさぞ寂しい事だらうと思つ
たが却々何うして四條、寺町、松原など巡行の道筋にあたる家々は金屏
銀屏引廻らして秘藏の名畫は宛然美術展覽會でも見るが如く各竹埦を結ひ
親類知己などを招いて衣香扇影随分見事なことであつた、午前の七時半頃
雨は全く止んだが泥濘の道を物ともせず今日の祭りを見んとて八方より集
り來る人は四條通を初め寺町通扱は松原など巡行の道筋は兩側に人の
黒山を築いてゐた九時四十分頃チキンコンの囃子と共に長刀鉾を始

め霰天神山、太子山、芦刈山、月鉾、郭巨山、木賊刈山、山伏山、鶏鉾、油天神山、保昌山、孟宗山、放下鉾、伯牙山、占出山、岩戸山、船鉾の順番に練出す、両側に黒山を築いた人々はそら練出したと一斉に動搖めき右往左往と散らばるのを警戒の巡査は汗になつて叱咤する最初の鉾が寺町四條に來た時分は最早彼れは十一時であつた例年に比べて三十分餘りも遅れてゐたさうだ其も其の筈で普通の晴天時でさへ大分骨が折れるのに雨後の泥濘脛をも没する有様であるから四條奈良屋の門前山本肩掛店の前では二三度も動かずなつたそして一番終りの船鉾が寺町四條下つた所へ來て神宮奉齋會其他休憩所に當てた寺町通りの各寺院で一同の者が晝餐に取りかゝつたのは一時前であつた、午餐後は戻り囃子の急調で各町へ戻つたのだがそれはもう四時過ぎであつたらう午後三時半頃大雷雨があつたが其にも拘はらず夕暮の有様を見んとて四條新町其の他の鉾町へ集る人々は又大したものであつた兎に角一年一遍の大祭を拜せんとて西は大阪神戸を始めとして東は大阪其の他附近の町村より集り来る老若男女は實に素晴らしいものでまだ宵山の日から大阪以西から汽車で来る人は一々京都驛で吐き出され一昨夜の如きは京都驛の雑踏は又とあるまいと思はれた京阪電車でも同じ来るわ来るわ何所から彼丈の人が湧て來たかと疑はしめる程である、昨日も朝來雨天にも拘はらず汽車や電車で京都へ入込む人は實に何十萬とも數へ切れぬ、其の際祭禮の餘波を受けて新京極などは晝夜とも雑踏を極め先斗町、祇園町等又餘德で賑つた然しながらお氣の毒なのは氷屋で京都市中の氷屋は元より伏見、向日町、大津邊から十貫二十貫と氷を仕入れ今日の祭りを目當に遣つて來たものが雨天の爲めに思つたより賣口が少なくて溢してる

▲雑觀のいろ／＼ 時々雨があつたので蔽布をした鉾や山があつたので

可憐名代の美術品は隠れて徒らに曳き擔ひ行くのは憾みの限りであつた▲振つてゐたのは保昌山で雨の爲めに人形を濡らしては一大事と被せるものもあらうにカーキ色の將校マントを着せてゐたのは俗も亦甚だしい、成程珍藏の人形を雨うたせにするのは惜しいが被せるものにもよりけりで彼れでは恰度衣冠束帯にサーベルを佩つた格で殺風景極るものであつた▲夫れを觀てゐた隣の五十格好の親父さんの言草が面白い、ハ、ア保昌は武士だ、その武士が今様の將校外套を着るのであるから之りや近くにまた戦争でも起らねばよいが……と奇抜な言分ちやないか▲奇抜といへば鉾の後へは必ず瓦斯會社の法被を着た人足が三四臺の荷車へ砂を積んで蹤いて行つたことだ、曳く曳かぬで八ヶ間敷い問題になつた巡行であるから瓦斯會社の所置も無理ではない、が例年にない奇觀であつた▲四條寺町角の天清支店の二階には京都ホテル大雲院前へ高棧敷を作つたのが都ホテルで何れも外人が椅子によつて物珍らし氣に見送り見迎へてゐる、中には小形の寫眞器を携へて一々レンズの中に納めてゐるのも少なくない、鉾から投げの粽を手にして怪訝な顔付であつたが説明を聞いて莞爾「有難う」を繰返すのも愛嬌であつた▲鉾の美を活動寫眞に撮影せんと遙遙の汐路を來て都ホテルに投じた佛人フエベツク、マスゲイツ氏は四條寺町角の青物屋の店前へ機械を据ゑて撮影してゐた又例年の如く四條高倉東入る青木周七氏方を奉行所に充てたが莊林下京區長や清々講の幹事連が詰懸けてゐた、面白いのは此處は新關といふ見得で澤山の富樫左衛門が控へてゐる譯で順で來た山は悉く此處で順番の書いてある紙片を渡して罷り通るのであるが袴の男が其紙片を蒔繪の文笥、緋や紫の綵を懸けて物々しく澄し返つて奉行に渡す、其格好が澄し切つてゐる丈に人毎に違つて中には失笑したくなる程体軀を固くしてゐるのがあつた▲寺町を松原へ曲つてからは所謂戻

り銚子も急調になり戻り子になるのだが本年は例の道路の危険から
銚子も止めるとかいふ問題もあつたやうだが大抵は矢張り囃してゐた▲こ
の一日一昨夕御入浴になつた久邇宮朝融、邦久の両若宮は山田御用掛其他の
者を従へさせられて寺町松原上る河瀬店にお成り巡行を御覧になつたが
御二方とも至極御機嫌麗しく拜された▲昨年は最高九十四度五といふ酷し
い暑さで卒倒したものも寡くなかつたが本年は雨といふ邪魔が入つたばか
り暑さは薄く測候所の報ずる處によると八十三度一で十一度も違つた、
結句少々の雨はあつてもこの方が結構であつた▲本来なれば夜に入つてか
らは四條磧や圓山公園は宵山以上に賑ふべきであつたが雨といふ悪戯者の
爲めに一向雑沓もしなく露店の婆め愚痴たらたらは晝間の夕立ち其所退け
の有様であつた▲その代りお蔭で新京極の芝居や寄席は待つてゐましたと
計りの大入りで祇甲先斗町宮川町等の遊廓も晝の數寄を凝らした美術品に
あき■たらぬ手輩が色衣裳に口紅の生きた美術品を見に行くので紋日賑ひはま
づお芽出度く料理屋も各間とも客影が重なりといふ盛況であつた

▲訂正 昨紙七の両二段目「銚子の稚兒」項中四行目の「ます云々」の一行
は二段目冒頭に入るべきを誤植に付訂正す

〔85〕明治四十四年（一九二二）七月十六日 『京都日出新聞』

●祇園會山銚子の順番確定

●祇園會山銚子の順番確定
例年の如く昨日午前九時から氏子中の各學區から総代が出て抽籤を行つた
が十七日の分の順番は

長刀銚子、芦刈山、郭巨山、油天神山、鶏銚子、孟宗山、占出山、保昌山、
月銚子、太子山、木賊刈山、錦天神山、放下銚子、山伏山、白樂天山、伯牙
山、岩戸山、船銚子

で廿四日には

北觀音山、橋辨慶山、黒主山、八幡山、鯉山、鈴鹿山、役行者山、常明
山、西行山、南觀音山

等で世俗傳へてゐる占出山は比較的後ろに居るので本年の婦人の産は稍重
いかも知れないといふことだ

〔86〕明治四十五年（一九二二）七月十五日 『京都日出新聞』

その日行事

本日午前市役所で祇園會の山銚子圖取がある、出す出さぬで久しく難産を極
めた此の山銚子の渡御、例の占出山は夫れ後ろより何番目か、呵々、又
東山若王子では今十五日瀧開きをするとのこと。

〔87〕明治四十五年（一九二二）七月十六日 『京都日出新聞』

●祇園會の事ども

△山銚子の籤取り 昨日午前九時より市役所に於て八阪神社清々講社幹事
びやま（マ）はこてうたうばんらしふがふきた ぎをんのあしんかうさいやまほこしゆんかうならび
山 銚子當番等集合し来る十七日の祇園會神幸祭山銚子巡行並に二十四
日の還幸祭朝山巡行の順番籤取りをなしたるが其の結果左の如く決定せり

▲十七日之部 長刀銚子、保昌山、白樂天山、蘆刈山、函谷銚子、木賊蒨山、
山伏山、伯牙山、月銚子、郭巨山、占出山、孟宗山、鶏銚子、霰天神山、油
天神山、太子山、放下銚子、岩戸山、船銚子

△二十四日之部 上り觀音山、橋辨慶山、淨明山、鈴鹿山、役行者山、

鯉山、八幡山、黒主山、下り觀音山
△市電運轉中止 巡行の順序は右の如く決定したるが夫れが爲め市電線中
當日切斷すべき箇所あるに付今十六日は終夜運轉とし十七日運轉を休止す

べき箇所は左の如くなるも烏丸線中四條以北松原以南は終日運轉すべし

△四條通烏丸以西終日△四條通烏丸以東午前五時より午後六時まで△烏丸四條以南松原間午前十時より午後六時まで

△銚の稚兒 長刀、函谷、月、鶏、放下の各銚には稚兒あり其の中、函谷、鶏、兩銚の稚兒は往昔巡行中墜落したるやにて以後人形稚兒を搭乘せしめつつありしが此の稚兒を出すには少からぬ費用を要し各々贅を競ひて底止する所を知らざりしより月銚町の有志者は斯くては徒らに見得を競ふのみにて喜ばしきことにあらず一層函谷銚、鶏銚同様人形にせんと議持ち上り熟議の結果愈々人形と確定し高倉四條下の伊藤久重氏の手にて製作し既に去る三月出来し同月八阪神社にて盛んなる稚兒竣成報告式を挙げたることあれば本年より其の稚兒の搭乗を見ること、なりし譯にて衣裳其の他は全部昨年用ひたる物を其の儘着用すること、なり放下銚は同銚町村田重次郎、川北義一の兩名當番にて稚兒は

錦小路新町西入松本平兵衛長男

松本長三郎(十二歳)

長刀銚は同銚町井上五郎兵衛當番なれど稚兒は

不明門通萬壽寺下る安田正吉長男

安田 正二(九歳)

と確定した

△籤渡し 例年山銚巡行の籤渡し式の場所は四條高倉東入南側なりしが道路擴張の結果本年に北側となりたり